

名作三十
六佳撰
增浦兜軍記

壇浦兜軍記

○第一

宵^よも起^{おき}肝^きて食^くし、夜^よ半^{はん}も念^{ねん}朝^{ちやう}も行^いふ故^{ゆゑ}も、虞^よ舜^{しゆん}の居^きの三^{さん}年^{ねん}もして都^とを
し、仲^{ちゆう}尼^じの政^{まつりごと}の暮^{くれ}月^{げつ}自^{みづか}理^りとい^い今^{いま}此^{この}時^{とき}も武^ぶ將^{しやう}の中^{ちゆう}興^{こう}源^{げん}の朝^あ臣^{しん}頼^{らい}朝^{ちやう}卿^{けい}不^ふ順^{じゆん}
を禁^い賞^{しやう}罰^{ばつ}を糺^{たと}し絶^たるを繼^{つぎ}廢^{すた}れるを起^{おこ}し民^{たみ}を安^{やすん}し衆^{しゆ}を和^{くわ}す七^{しち}德^{とく}八^{はつ}教^{けう}
谷^{やう}七^{しち}郷^{かう}賑^{にぎ}わふ民^{たみ}の鎌^{かま}倉^{くら}は所^{しよ}大^{おほ}藏^{くら}の郷^{かう}も營^{えい}居^{きよ}有^ある、さしも大^{おほ}小^{せう}手^て強^{きやう}か
し木^き曾^その冠^{くわん}者^{じや}義^ぎ仲^{ちゆう}の江^{かう}州^{しゅう}粟^も津^づの淡^{たん}と消^{しやう}平^{へい}家^けのあき名^なを文^{もん}字^じが關^{せき}も殘^{ざん}
し、治^ち國^{こく}平^{へい}天^{てん}下^げの功^{こう}古^こ今^{いま}も秀^{ひいで}未^み家^けも先^{せん}蹤^{じゆう}なき大^{たい}おごんの大^{たい}將^{しやう}六^{りく}十^{じゆ}餘^よ州^{しゅう}
の物^{もの}追^{つい}捕^ぷ使^し、日^{にっ}本^{ぽん}弓^{かう}馬^ばの棟^{とう}梁^{りやう}と成^{なり}給^{たま}ふと併^{しかし}佛^{ぶつ}神^{しん}のおうご也^{なり}と神^{しん}祇^ぎを禮^{らい}
し百^{ひやく}靈^{れい}を懷^{あつ}給^{たま}ふ餘^{あま}り、秩^ち父^ふの庄^{しやう}司^し重^{しゆう}忠^{ちゆう}を以^{もつ}さいつ比^ひより南^{なん}都^と東^{とう}大^{たい}寺^し大^{たい}
佛^{ぶつ}殿^{でん}を再^{さい}興^{かう}あり、既^{すで}も伽^が藍^{らん}成^{じやう}就^{じゆ}せりと本^{ほん}多^たの次^じ郎^{らう}近^{ちか}經^{けい}を以^{もつ}訴^{うた}ふれば根^ね

井の太夫希義岩永左衛門尉致連、其外當日の諸役人膝を屈し相詰らる、
 又者なれども本多の近經召よよつて百分一も移せし伽藍の繪圖、御座
 近くまつらひ掛佛閣の高廣莊嚴の次第外も記しさゝぐれば、逐一も上
 覽有、重忠の佛智も叶ひしか、我思ふ如く造進せし條、嬉しや解脱の善
 根を植たりと、嬉氣も見へ給へば近經はつと恐入、こゝ冥加も餘るに
 嗣主人重忠造營の功を得たると偏も君の洪福もよつてなり、太政入道
 清盛の伽藍を焼て衆類を族滅す、君の伽藍を再興有天地懸隔の違恐れ
 ながら子孫の繁榮極有べからず、鎮護國家の基此上やいべきと祝
 し申せば一同も皆万歳と壽ける、大奥の間の廊下口鈴の綱音ないて、重
 忠の奥がた玉房は前座の間近く手をつかへ誰お取次と窺へば賴朝
 は覽し珍らしやちとぶの妻女くるしからず直もやせ何事ぞふと証
 有、いやお願ひ私からすみだい様のは使、たい今奥もて承れば、此度の太

佛くやうかねて君は上洛とのほど、みだい様もは參詣有べきに立願く
るしからず、いは一所より上洛遊べし、度思召侍へば、窺ひ奉つれとのほ
と也と述よける。頼朝打うなづかせ給ひ、今四海一統すといへ共、木曾が
餘類平家の殘黨、義經錦木戸が討洩され、隙を窺ふ此時、節虚と鎌倉の明
がたし、我の皆成就の後上洛すべし、此度の政子計上洛しくやうをどげ
給へと申せ、さあらば玉房付添用意せよと返答有ければ、玉房悦び是
はく、お嬉しや、みだい様も、嘸ほきげん、お悦や爲と勇て、かくへ入よけ
る。頼朝重て、いか根井大夫岩永左衛門、兩人共、政子が供し上洛し、万
卒忽あき様も心を合はからふべしとの給へば、根井のはつと當惑顔、岩
永左衛門進出頭をさげ、聊に誕を背よ、いひね共、かゝるめで度は上洛
も、臆病のとばえりかゝつたる老人と相役仰付られ、心を合供奉仕らんと
身も取て不祥の至、此儀は餘人は仰付られ下されかしと、根井の大夫

をえりめ懸憚（けんぱん）なく言上（ごんじやう）す、根井（ねい）の大夫氣色（けしき）をそんじ、ヤア口荒涼（くわうりやう）也、岩永殿、あつとやそふやいなどやそふや未お請（いまだ）もせざる内、臆病（おくびやう）のどばえりかゝつたる老人と相役（しやうやく）、不祥也との言上（ごんじやう）す、推したり、我娘白梅をふさいふ所望有しか共、愛甲（あいかう）の前司太郎が子を養子（やうし）、簪（むす）の契約（けいやく）せし故、承引（せういん）せざるを憤（いきまはつ）てのわんざん、比興至極（ひきやうしごく）とはつたとよらめバ、ヤア左様の私の宿意（しゆくい）を以、は用（さまたけ）を妨る岩永はあらず、何と成共いんべいへ、臆病者（おくびやうしや）の相役（しやうやく）は得ならぬ（國）、それもすいしたり、彼倅相州（かのせがれさうしやう）、箕尾谷村（おのやむら）の谷蔭深（たにかげ）く生立熊猪（くまのしや、ねと）は猫（ねこ）の鼠（ねづみ）どもてあつかい、かたのごとくかけ鳥などいすれ共、未兵法（へいぽう）の奥義（おくぎ）を知ず、弓矢鍛鍊（たんれん）の後家を知べしと武者修行（しゆぎやう）も出過（でか）つる源平の戰義經公（たいぎへい）の御手（ごて）も屬（しよく）し、實父愛甲（じつおあいかう）の名字（みやうじ）も勿論（もちろん）我方（わがはう）へも未來（きた）らねバ、根井共得名乗（ねいのら）ず、そだちし箕尾谷村（おのやむら）の在名（ざいみやう）を取て、箕尾谷四郎國時（おのやむらしやうくにとき）と名乗平家（なみのりへい）の侍上總（かづさ）の七兵衛景清（かへきよ）も出會（あひ）、少みぎわへ引退（しりぞき）しを、引矢不鍛（ひやふたん）

鎌の者共が臆病也と取さたを聞誤つての思ひ違、おかしくといへ
せも立ず、其戦ひの壇浦船と陸との詞戦俗といふ川向の喧嘩もひとし
く、箕尾谷四郎廣言放つてゐたりしが、兵船一艘を寄上總の七兵衛景
清とおめいてかく始の詞は似ざりけりかいふつて、逃て行、景清長刀
追取のべて討ならばまつ二つは成べきを能くの臆病者、刀物よとしな
ぶり物よせんとや思ひけん、長刀小脇よかい込でみおのやが着たりけ
る兜の頓項を取はづしてんがうまじくらむんづと抓でうんと引、身を
遁んと前へ引互ゑゑいやと引力よ、鉢付の板より引ちぎつてこけつ、せ
ろびつ口へらず、去ゑても汝恐ろしや腕の強と云ければ、景清は又みお
のやが首の骨こそ強けれど敵もみかたも物笑、なんと億病者で有まい
かとあざ笑へば膝立直し、其時の軍奉行の土肥の眞平、みおのやは大木

刀景清は長刀、手を碎て戦しが何とかしたりけんみわのや、太刀打折て力なく少水際へ引退隠したるゝはあらざる故に帳面も其通記たりとの物語に帳面がせうこよ、但貴殿は左様の時太刀打折た軍は是迄、首されとて切するか、かゝるも引も軍の習必竟の勝をかちと云とゝ景清世ゝながらへ君を祖奉る風聞有、吾倅又景清を付祖恥辱を雪ぐまじき物ならね共、それの後のさた必ゝ今の詞忘るゝな岩永と包、無念の目ゝ洩て、こぼるゝ涙を袖ゝかくしは前ゝ向、先年系圖ゝ書のせ上覽ゝ入たる倅行がた知ず不奉公者の親として歴ゝゝ立まじり座並を穢も恥かしきゝ増てみだい所のは供恐すくなからず、は誕違背出るゝいゝはね共、此義の餘人ゝ仰付られ某は本國ゝ浪人の願、所領を差上るとすは冥加あし、倅があんひを承はり届る迄暫預奉り度存いと恐入てぞのべゝける願朝始終を聞召、子ゝよつて親ゝの名をも上るゝ、老人の心遣不

便也、上洛の供を赦し望のとく所領を預り置上り、かへすとも又望よ
るべし、浪人の住所は心の儘勝手次第逼塞すべし、本多は跡備岩永の上
洛の先手は進直も都よりどまり重忠よりくもり、万事さたせしむ共指
圖は背き我意のまかた有べからず、就中上總の景清は平家無二の忠臣
國士無双と聞、あへなく討んも殘多しともかふも重忠とはからひ、穩便
のさたあらまほしけれ、心へたるか岩永本多罷立と、簾中深く入御成給
ふ佛法王法此君より再び榮ゆる秋津國つぎぬ、めぐみぞ、月日立、春も漸
くおりの國夏よなるみやあつたの宮、聞へり人の國迄もかくれ名高
きは神みて、方の願取分て惡氣疫難さいなんを祈べきとくを宮づこの
散敷花をかきよせて、神のは庭の朝清散殘たる其木末より、土も春有ふ
せり也、春の旅、暖ならず寒からで思ひ有身も折とは心をひらく白梅り、
父よさそれ古郷を出先りあふみの長濱へ、長道中を是ぞ此、おりの

あつたと聞からゝ態も参らまほしかりし、いざと付ゝお供ゝて乗物つ
 らせ参詣有、やい皆の者、此は社こそ楊貴妃の有家を尋唐土の方士が渡
 りし常世の島蓬萊山とはこそぞかし、さずい貴き御神様皆信取てよふ
 拜みや、それゝ付此お社のねぎの娘は景清が妻なればこそゝ隠れ忍び
 ゐまい物でなし、我つまの、みおのや殿行がた知ず、親子ふうふの名は有
 ながら得あひぬも又とし様の、知行差上住なれし鎌倉を立のいて此こ
 どく、旅他國なさるゝも彼がわざ景清と見るならばかきむしつても恨
 いふ心、其時は誰ゝも力を付て頼ぞやいのとの給へばめのとのさへ田
 がは尤く、此人數が一口宛くひ付ても、景清の一人や二人お氣遣遊ば
 すなと、力をそゆれば、嬉しいく、大宮司ととへば隠ないどや住家
 いづく、誰ゝ尋ふぞあれく、あそこゝ人こそあれ、太儀ながら、うへ聞
 て見や何の太儀と立寄て、是物問ませよ、ねぎ殿なれば知てゝ有ふ、大宮

司殿のいづくぞ教て下され、扱の旅のお人か、大宮司とすの我々が
頭殿、今で二人有子息の夏茂様とて今の代取社の後、大門作りが
そでござる親の通夏様近年隠居なされ、海山を見はらして濱面又館
を立、衣笠様と云娘と一所ゐれ、あそこへ白髪まじりのそ
うがみ、大小さいて、女中が一人付て見へるあれが通夏様衣笠様社、拜
なされて頓てこゝへとおしゆれば、お姫様聞てか聞た、願ふてもな
い、首尾待請て詰ひらかふ、下とも乗物もとりの外又待ておよ、ど
様お見へなされたらこゝもとすせ、まだ見へるゝの間も有ふが其間
自も、いざ神前へと引つれて、一禮、いせもふでらる、春色花漢たり鶯
の百囀、濱俗の地無何の郷心自得すれば、壽疆なしと口すんじ、娘を友な
ひ花よさそのれうかれくる前の大宮司、そうちは誰じや福太夫か、此頃
あゝぬかいるともおらないか、いや別よかいるともそれよ、たつた今

旅の女中がお二人様を尋て参られ、追付此所へお出なさるゝとやたれ
 ば、其間はお宮へ参つてこふと云ていたが、誰ぞやな見へたらばあふ
 迄よ休め、身の折ふしの他國あるき近付も有尋來まい物ならず、娘
 を尋てくる女中の誰じやあ、いや私でござんすと立出る白梅、こな
 たなれば猶見知がないと親子、いぶかる計也そなたも存なされいで
 も、此方の景清殿と譯有中、お前のかたも忍び有と折ゝのみ玉章よ、お二
 人のとよふ知てゐる、久し顔も見ぬ故よ、はるく尋参りたり、早ふあ
 せて下さんせと心せかせてうら問、父の驚く衣笠のわるふ香込早合
 點、其景清殿連てござんせあなせふと、あいそなけれど云かゝり、衣笠様
 そりやひけうな、慥にこゝよゐる人をつれてこい、こりやりんきで
 ござんすの、よいがてんさつきよから此胸の内くらゝとよゑかへ
 る本妻じや物りんきせい、でもりんきと見らるゝからいあなせ

まずとふつつりならぬ、せんないとも隙入すといなまやんせく、そ
んなれば景清殿の實正かくもふて置まやんしたの、いらぬ念に入る
八夫が女房と一所ゐるが珍らまいか、いや珍らまうのない其一言を
聞ふ爲女子共合点か心得ましたと一やうまかくしさいたる一こし
のつバをならして聲くゝ遁しのやらぞと詰かくる、大宮司娘を押かて
ひ、誰なれば女のさい、此跡のけうがつたり遁走する我くならず子
細をかたれ名をなのれ、こまやくなと云す共景清をこゝへ出まや、其
上でいゝやらいでも名をなのる、それのむたい景清の三年此方ありか
を知らず、いや知ぬとい云せぬと争ふ半へ根井太夫走り付娘をせいに付
くを押えづめ、大宮司通夏と云は邊よな、我らの根井の太夫希義と云
者は我娘、此度鎌倉をお暇、江州へ蟄居する其義の云ふ及ず、過つる
源平八島の戦和主が聳かづさの景清、みおのや四郎と合戦のせうぶそ

れも聞及ばん、其みおのやとやの某が養子^{きよこ}、是が夫^{おつと}、其場の耻辱^{ちじよく}つら耻しくや思ひけん、今以行がた知^{しれ}ず、夫を思ふ女心、景清いこんを合^{あひ}今日此所通行せしを幸^{さいはい}、景清の和主^{わぬし}が智なればかくし置^{おか}んど我も知せず此まぎふ及ぶ、殊更^{ささら}景清我君頼朝公を狙奉^{ねらひ}る御敵、かたゝ見のがしての通られず、かくして館^{やかた}をさがされば、大宮司のふちんたるべし、景清を出されよとのつ引させず詰^{つめ}かけたり、^調扱^{あつか}の聞及根井の太夫殿よな、さいぜん御息女^{そくやよ}景清妾^{わめひもの}なりと偽^{いつはり}も問落^{とひ}さん爲、どの知ず娘のまきま取込、拙者^{かづ}の却ては息女^{そくやよ}景清がありかを尋んと存る所、いやはやこちらあちらの仕合、長^{へん}と返答^{たう}すも旅行^{りょこう}の妨手短^{さまたげてみじか}ふすふ、平家の一門滅亡^{めつぎ}の後、景清のかた切て参りもせず便もせず、此方の娘もなつかしがり、若有所^{しよ}聞出さればお知せよ預^{あづか}りたしと返答^{たう}す、一旦^{たん}のちんぢの尤^{もつと}能分^{ぶん}別^{べつ}して見られよ一樹^{いじゆ}の蔭^{かげ}の雨やどり一河^がの流^{ながれ}をくんでさへ人の情の

捨られず況^{いふんや}多年の智^し鼻^び女房を預る程の景清、便もせず参らずといふ共
誰^{たれ}かさあらんと思ふべき、鎌倉殿はふしんのかしらん時も其いひ分^{わけ}で
濟^さべきか、よい仕合で歴^{れき}代の神職^{しんしやく}もつゑゆせられ、子供のるらうせうし
く、此理^{このこと}を辨^わずかくし通すか根井の太夫、悪いくせある、斯^か様のとせん
ぎゑかゝり、云ずばよしとてかいやり、又は捨置^{すておか}す、館^{やかた}をさがそふか、但^{ただ}
かくし置^おす存^{ぞん}ぜぬと言^いせうと、當社^{たうしゃ}明神^{めいじん}の云ふ及^{およ}ず天神地祇^{てんじんぢぎ}を驚^{おどろ}し、せ
いこん立るか二つ一つ返答^{へんたう}あれ、大宮司と、ちつ共心^{きんしん}赦^{ゆる}さぬ、面色^{めんしよく}大宮司
横手^{よこて}をはたと打^う、疑^{うたがひ}は尤^{もつと}誤^{あやまち}入たり、根井殿、聳^{せう}の不便^{びん}も娘のかはいさ
子供らがらうよかへ所領^{しやうりやう}よかへ何しよ包^つ申すべき、ア、淺^あましや神よ
つかへてもぼんぶ心けふのを知^しざりし、平家の一門都落^{みんとく}の時此娘景
清と一所^{いしょ}も落行んと云しを、船^{ふね}も浮波^{うきなみ}ふしうきめよあはん不便^{びん}さよ
預^{よろこ}けんと云を悦^{よろこ}び、預^{よろこ}りし其時、ふうふのゑん切せて預るか取戻^{もと}さば、今

の疑は受まゑきよ、よい年をしてちゑなしと根井殿笑給はん、耻しや面目なやどはらくと、こぼるゝ涙をおさゆれば、なふ私も西國へお供せば一思ひ、なま中又預られ夫の生て有ながら、二年三年便りもなく捨られし我命、おしいではなけれ共もしやどひけうな心から、段々ほくらうさせます、赦して下されど、様どかつぽと伏て、泣ぬたる、娘泣な分別有、なふ根井殿、我先祖のおりの國の造明神をいたいき祭て千百年、かりとも曲らず、偽らぬ、誠を以仕し身の大凡俗どひとしく、せいこん立ん口おしとい思へ共、耻も人目も子供らよはかへられず、只今せいこん立ち疑惑の念を殺給へ、清給へとつい立上れば、暫と根井の太夫走り寄ていだきとめ、よしなき所望誤たりもふせいこんよ及ず、今、今の悔のほ一どん我しんこんをつらぬいて、貴殿を疑ふの神を疑ふ勿体なし、とかく長居も神慮の恐れ早速ながらお暇す、疑晴てござらふか、参るく

大宮司殿再會必期あらんと娘娘も笑顔を作りずいぶんは無事で達
者でおさらば、さらばと立隔つ、もろこし人も仲實の歌をしるべよふり
さけて、今や見るらん春日なる、笠の山といづる月空も、五つよなる鐘
の世上よひく東大寺、大佛供養もけふあすと諸國の人の參詣を、まつ
や町筋せべしとて山門のかたほとり、取ぶき屋根も置露も月の光もす
みる茶の、のれんのもん、釜敷も、へついの煙たへまなく、かふて行人、う
る人、女主の顔像むつくりとしてうまそふな、むし立饅頭か、しやん
せ世間あるい、多けれど、歌も、青丹よしとよみ奈良饅頭の、あんもよ
し、殊更神のほちかひぞひまん頭のむし、は笠の山、咽がなり、五
重甌も立ゆげも、かすがの里、賑はへり、こゝも平家ふだいの忠臣かつ
さ七兵衛景清、さつま五郎信忠と云者有、一門は落命の折から取捨も成
べき身の、生、死、かた、く死、やすし、長生して主君のあだをほうせん物と

山林さんりんも身を委ゆだね時節ときふしを窺うかがひゐたりしがこんど大佛だいぶつくやうの爲ため頼朝よりとも上洛じやうらくどほのかゝ聞きて、心を合せかくれがをぬでの玉水たまみづ日ひにくれて、急しんと初夜しよやゝなら坂さかや、まん頭まんづうる家の床や儿このはし暫しばほめんどたゝすめば、是こゝにいづくよりほさんけいなされしぞ、夜よゝ入いてはくらうや、ゆるりとお休遊やすろばせと挨拶あいさつ片手かたてゝたばこぼん、お二人ふたりながらさゝのなりそなほ風俗ふうぞくおいやかゝ知しね共所ともところの名物めいぶつお慰なぐさめとさし出す饅頭まんぢうより先女房せんじやうばうの、ゑがほぞ一ひとと口くちくゝまほし、景清けいせいの只ただ一心いっしんゝ手てだてをくふうし返答へんたふせず、五郎ごろうみせかる追従つゐしやうゝ貴たつとい寺てらの門かどからとすが、そもじの風俗ふうぞくで頭饅まんぢうの味あじも思おもひやられた、見みれば門かど構かまゝも行灯あんどうゝも書かて有あ、家名けなの十一屋じゅういちやか、此心こころ推量すいりやう致いたした饅頭まんぢうを十じゅうかへり一つそゆるといふ心こころで十一屋じゅういちやと付つたのそふかく、ほんゝ是こゝもよいほ推量すいりやう、成程なりほど左様さやうとすたいがこつちの心こころのそふでない、朝あ七しちつから店みせ出でてよるの四よつゝみせ仕廻しきまわ七しちつと四よつの時ときを合あ

せて十一屋とやます、是も尤、頼朝上洛召れしと聞付ふもさぞあらん、其
外の參詣諸國の入り込左程せい出さいで、賣といくまい、なんと个程
結構、諸堂廻廊以下再興し、肝心の此山門計残した、心有てか、但、始
末か音も聞た程もない頼朝のえわいやつだと打笑へば、いや、此
山門のそのかみ、聖武皇帝様と云王様のほこん立なされたを、平家のわ
る坊主清盛入道が、此大佛をやいた時残つた、此山門計能登守教經と
云大惡人が、大佛様へいかけた矢が、それて此山門のたる木も當つた矢
のねやがらが、今も有晝よふ見さしやんせ、いかゝこわい者が、ないわ
ることがしたいとて、日本第一の佛様をやきくづすと云やうな惡人がま
一人と有ふか、佛計かあの堂では五百人八百人、此堂で千人二千人、人
計も四千人程やき殺した、其報火付の大將頭中將重衡、京鎌倉を引渡さ
れ、果に衆徒の手まかりつて七日さらされ、首切れた、其跡が山門の脇も

有是もあした見さしやんせ、左様も段々と悪行の積つもつた果は平家の今のさす、主ももけらいも頭を指出す者一人もない、此山門も手も懸ず其まゝ残し置るゝ、末代平家の悪逆を、人々知せてたしなません世の見しめじやどの物語、私がやうな何も知らぬ者でさへ、尤そふも存ますと、それと知ねば女の口齒も衣きせぬ長咄よそ聞あす景清が本意なさ悲しさ口惜さ胸もくだける計よて忍び、涙よくれければ、なま中のと問出して五郎も返答あぐみはて、有て過たとふに必付つそへつが有物、なんの平家計がそふわるふも有まいと云ければ、いへくこんなとでない、まだ大それた悪事が有咄ましよ、いやもふ承るゝ及ぬと、聞ぬ先から耳驚かす四つの鐘、ひいき、渡ればあれ四つがなるみせしむひ時、各様も宿取てお休あされそこのいて下さんせと云を幸過分くと、立のけば、くどよ水打行灯、えめし道具一つも取直さず、かたへの上し

づさらくと引廻せば、五郎見かねて是女中、くらへ入た物も盗取世の中それは近頃不用心、まそつと念を入れて置れよと氣を付れ、いへく盗人のはいくわいたい平家の代の時今の源氏の玄ひ深、せいひつな世もそんな氣遣ちつ共ないと、戸さくぬけ代とい、今の時代でござんと、口も手本もしやんく」と仕廻て別れ立かへれば、よしなことを又いふて、一度の恥も二度の口、ふさぎかねてぞみへよける、景清五郎をかたへも招き聞れたるか五郎殿賤しき女の口すらかくの通りなれば、御一門の身の上を世上の嘲弄思ひやる、主君の仇を報せんと死べき命をながらゆれば死も増る耻を聞、此山門も鏃幹を其儘置いて、末代平家の譏を残す、頼朝を討つは是を取捨て後のところは思ひずやとさしやけば、實もく口すから傳はるとい、中絶する折もあり、おかえ見するに情なし、といふて夜の手わざより取捨も成まぬ人間を窺ひ晝のたと云、せも立

すゝさだるし調、一心の眼力がんりきを以て捜さべしんのやみも晝同然さうぜん、幸人もしづまつたり、御邊の足首をつかんで指上さしあり門のかぶ木きも手はどい
かん、それを傳ふて二かいへ上り垂木たるきを一さがして見られよ、なふ其
段はたらきの御免めんあれ御存の我等眩暈げんうんやみ高い所へ上れば忽たちおこる土の上の
働はたらき何也と指圖さしずの背そむくまじ、聞てさへふらくと目がまうやうぢ
と頭かしらをかゝへ、胸押むねおし撫なれば、よし、人の頼たのまゑとわらんづぬぎ捨身を
固め柱はしらを傳つたひ上らんと立寄所のまりお、ち上大内の松蔭しょういん、人聲足音高提灯たかちやうちん見へ
来れば、折をりしなふ五郎殿、やり過し後又こそと打つれ木蔭こかげ忍しのびけ
る、山門の内より只一人長刀を杖つゑつきのつさくと来る大衆さうじゆう双方行
逢あひそれと見るより調、岩永左衛門殿いわたえざゑもんひな、御けらいよも抑付おさられず御大
身みのからく敷、御自身じしんの御勤つとめ御くろふ也と挨拶あいさつす、大日坊だいひつぼうか、身の御
臺所の旅館りやくわんへ参上し只今退出たいしゅつす、夜中只一人いづかたへまいるる、元

來和僧わそうの平家のふだいかづさの忠清たかしよが弟、景清がふちなれば我君のさ
す敵、とつく誅ちうせらるゝ筈の所身が取持、兄弟共不通つう致し只今の平家の
ゆかりなし、疑はるゝ程のに奉公ほうこうの上させんと、請合くわいてついだる首、何
か打捨うちすて平家の餘類よるいを尋、一手がらあふて、此左衛門迄きよこん者も成、
すいぶん心がけめさ、それと付和僧わそうがおいの景清、ながらへて此世も有、
及ぬ仇あだを報はすせんなどゝ个様の時節じせう心がけ、和僧を頼みくまい物でなし、
さあらば快頼かいらいれ潜ひそか知されよ、討て成共からめて成共岩永が、高名もせ
ねば武士道立がたし其いしゆは、景清けいせいといこんなければ共、みおのやの
四郎と云者景清を付狙ねらふと聞、其みおのやと討せては根井の太夫が娘
を我手に入ると叶はず、景清を我手で仕廻しまわみおのやも鼻明せ、根井が
娘を我手に入たさ、とを分わけて頼たのみ合点か、是こゝは何より安やすい用、ちつ共お
心くるしめ給ふな、个様な用有ふとい存ぜず、我等われらが高名も仕らんと

くめん致し置たれ共、そこもとへ奉る、あんどなされとく、い中の、一通
 取出し手よ渡せば、挑灯^{てうちん}もてど火かげよてらし、見ては悦び讀^{よみ}で、うあ
 づき、いたゞいてく、い中し、できたゞ、坊過分^{ばうくはぶん}、いさいは其時さらば
 く、挑灯參れと夕露^{ゆうつゆ}の草ふみちらし通ける、後^{うしろ}よ立て景清の始終^{しじう}とつ
 くと聞すまじ立出^{たてで}貴僧^{きそう}は大日坊^{だいじつぼう}よて渡らせ給ふな、我こそ只今岩永よ
 頼まれ給ひし、かづさの七兵衛景清と聞て俄^{にわか}よげうてん顔^{かお}、驚給ふな
 とゞく承^{うけたまは}る、岩永よ返答^{へんたう}の問よ合の偽^{いつはり}か眞實^{しんじつ}の所存^{しよぜん}なれば手
 のみせぬ、出家とすおちかいのよしみを存^{ぞん}、下手^{へた}くろまう念ふ念を、入
 すと云せも立す扱^く、面目^{めんもく}あい、佛祖冥理^{みふどうり}今の返答^{へんたう}が眞實^{しんじつ}でたまる物
 か、いやといへば即座^{そくざ}よ命をとらるゝ、それ悲しいではなけれ共ながら
 へて善果^{ぜんくわ}をつまん爲^{ため}、間よ合共、一門の滅亡^{めつぼう}聞とひとしくあんぜ
 しは和殿^{わだん}がとけんこの對面^{たいめん}満足せり、こよひこゝへ來りし、深い願有

てのと、打明て語られよ何れの道も疎略なしと、無二の詞も心とけ手
をつかへ、貴僧（貴僧）の爲も平家は主君、たとへ出家の身成共、あへなく頼
朝又亡（はろけ）され給ひしうつぶんの残る筈、あなれ景清も力をそへ頼朝が仮
やへ忍び入、手引をなされ下されと思ひ、かんでぞ願ける、安いとく、
手引せんと拔打（ぬき）はつしと打つをひらりとかひし、其手を取て引かつ
ぎ大地へどうと打付のつかしり（間）、おちながら實（み）の入た悪人玄々の、か
けがへもなき弟の儕（おのれ）をかんだ當なされ、追はらなれし我親の忠清殿は目
水晶（すいしやう）、親程こそあらず共景清が底（そこ）の根性見ぬくまいか最前（さいぜん）かくと知
たるゆへまつ二つよとい思ひしが、おちの親の孝（かう）も有禮義も有、どかく
云（い）内心をひるがへせば、互も主君の爲と、かんよんせしももふ是迄、く
いん念せよといしぎ付る、待景清（間）ちつとゆるめて云といひせい、儕お
ぢを殺（ころ）したらば從來がよふ有まいぞ、近いせうこの左馬の頭義朝が子

の源太義平、おち帶刀前生義賢を殺した故惡源太と異名を付られ、六條
 がいらで首きられしを知ぬか、儕も我を殺したら、惡七兵衛と笑はれん
 よふ分別せよとへらず口、惡七兵衛は愚のと、鬼七兵衛、蛇七兵衛共い
 はいへ、なん共ないと、腮又手を懸首捻きらんとする所を、さつま五郎
 飛で出き、腕取て引のくれバ、すきをあらせず大日坊ゆん手のかひな
 玄つかと取、うんと聲かけ景清が兩手を二人が土ふねぢふせやい景清、
 いかゝ二相を悟共さつま五郎が此躰がてんが行まい、大日坊と某終
 又對面いせね共書狀を以示合、此度の大佛くやうを幸賴朝を討ふ、いさ
 いかふくと某が進た、賴朝を討でない儕をまづかふせん云合、深い
 工思ひ知たか、なふ大日坊、我が出るを待兼たで有ふの、待兼た段ではな
 い、景清が名を聞貴殿も出とい知たれ共、顔みぬ内いいくせのあんじ、
 書狀も岩永のほめふかけ見へ次第同道や、管、幸のみやげ、なは打てつ

れ行ん尤ど、腕捻廻すまぢつ共動かず、景清くつくと吹出しもふぬか
すとそれ迄か、まびど成て物いれぬ、いふておけく、死人とい
誰と、いふともふあいと汗水成て身をもがく、云となくば是見よと
左右をひと腕がへし、ころころび打ながら生どり又は叶ふまじ
首としてつれ行んと抜合はさみ立て切かくるゑたりやおふと渡り合
互ふみがきしやひばの光、月ようそぶくかすが野の飛火をちらして、切
ひすふ大日坊がほうがまち、おどかひかけて切付る其たち風もさつま
五郎、一人立で叶はじと跡をも見ずして逃うせける、大でしぬけめ
討もらせし腹立ど、大日坊も乗かすり吭のくさをぐつくと、つきな
らす鐘の聲、一、二、三、四、五、早七ツか、八ツ九ツも我みへ入ざりし、頓て
みせ出す饅頭屋がよしずのかげ忍びおて、とくより窺ひ見るとも知
ず衣ひつばぎけさもぎ取、ずんぼろ坊主はぎむくり一色残さずかき

いだき、まがいをけちらし忍び行おちの首切其かわり、名字の上總も云切て、悪七兵衛景清とい此時よりぞやける、女房よしずをおとり出扱こそく、景清と見た目いちがぬ君を狙ふ疑ない、かふ云内もみだい様の以前が氣遣、かりやへいかふか但夫は知せふか、いや、景清が落先を見付て置が肝心かんもん饅頭屋が、むし立見よとまたひ行、あんもよし又まあんよしけなげ、成けるかす、が山、鹿立みねの朝風は、敵のゑいぐいや、ちりぬらんかづさの七兵衛景清は、こんどの供養は頼朝を討てもうむをさんぜんと、出立衆徒のよせ姿すはだよきたの藤なめ、まけがな物の大鎧、草すり長よざつくど着、上よ衣の玉だすき、けさをむすんで鉢まきし、敵をめいどへ送りやる、十王頭の脚當は我身をしゆこの毘沙門小手、重代のあざ丸、あしお長よ結びさげ、跡よつゝきし女房の、心しめたる高からげゆだんせぬ氣の一腰の、この口早く抜かけて付従ふ共まらゑ

の長刀、小脇よかいこみ見渡せば、廻廊諸堂とくく、家々の幕兵具をかざりけいごきびしく見へたりける。音せで通らばあしからんと所よ大音上、けいごおこたり給ふなど呼いつてかけ通る、こゝぞ頼朝のかりと思しく、ひた白の大幕風よなびいてゆうくたり。仕おふせし嬉しやどのつさくと歩しが、いやく、内も用心さぞあらん千里の馬も躓侮てふかくをどらば一期のかさんふてき達ハ無益ぞと汀のさきの小鯨を、ねらふ忍び足、待と一聲かけしれば、さしもの景清びつくりしふりかへる。なふ肝の太い景清我君を討ふとい、あたしか鰻頭屋の女房と思やつたらあんの外のくい違誠ハ本多の近經が妻のからあや、ゆふべあふた覺てか、一寸もおくへんやらぬかへせく、ヤアこゑやく也、女相手とする景清ならず、ずつ込でゐよと、取合すいやく、そつちよせいでもこつちよ成と、ずいと抜て打懸るせんかた長刀取直し、石つきよて受あ

がしむすんづほどいつあしらへ共、女メもきどくの太刀さばきヤ隙ひま入め
んどう也と、石づき取のべぐつとあてみよ本多が妻、めくるめいてたち
たちく、打うちすて歩行あゆみゆく先の幕まくをひらりと押おし上あて、打うちかけもるゝ追取おうちどり刀、ち
ちぶのかく方玉房たむらはせんすつくと立、思おもひ懸なく景清の又びつくりし
て、立どいまる、くアから綾あや誰たれを見て景清呼よひり、其景清どれどこよ、それ
こそと教をしめればいやく、是こゝ所の衆徒しゆど、あの出立が唐綾からあや目めよかしらぬか、
景清ならバ平家も取ても仁義じんぎをかねし勇者ゆう者と聞、我君われうを狙共尋常じんじやうよな
のりかけ神妙しんめうの働はたらきこそ有あべけれ、ひけうなさいしい姿すがたをかへ、女計にの此
かりやへおどなげなふななどこられふ、必かならずそこついやんな、是坊様、こん
どのくやうよ頼朝様へ上洛じやうらくなされず、こゝにみだい所政しやうせい子様のおかり
や、坊主ぼくしのくる所でない歸かへらえやれく、但しかに方角はうかくは迷まよふてか、大衆たいしゆの
馳走人ちそうにん、本多次郎近經道ほんたじやうきんけいみちあるべせよと有あければ、つと答こたへするく、と立

出箇様の用も有べきかと、とくより木陰は待受たり、我等本多次郎近
經、頼朝公の詔を請、大佛くやうの内大衆方の馳走、又猥成えかたあ
れば、禁も我等の役方角は迷ふての推参なら、道のあないせん、狼藉な
らばはからふ旨有、返答を承へらんと、そらえらすして、ちかれば、
すいまく、えいなんの坊主像をかゆる、一旦の計略、頼朝を討ふ二つ
のあい、かづさの七兵衛景清見て置と、頭をつゝみしけさかなぐつて捨
ければ、扱へど二人の女も詰かけ詰かけ眼は氣を付ゆだんなし、近經え
ぱしとおくを諫女房をせいし、景清、我君を平家の仇主人の敵と、狙
るゝ以外のひがと也、太政入道朝恩を忘れ、やしもすれば、天子をあやま
し民をくるしめし其積悪、後白河の法皇院宣を賜り、平家を亡ぼせよ
との勅詔なれば、平家の敵の身のおこり、我身を我身の敵と、知ざるか、
良禽の木を見てすみ忠臣の君をえらんで仕ふ、心を改只今より、頼朝公

又奉公せよと呼よばれば、頼朝又奉公せよといなんのたゐと、二言と吐
 かへひねり殺ころしてくれんすと、はがみをなし、口おしやこんどのくや
 う、頼朝上落あがりしたれ共、かく云景清を初平家の餘類よるいを恐れ、みだいと世上
 へ思はせん爲、態女原わだこを召めつれたりとさつま五郎が、注進ちゆうしんを、彼かれが我を誘さそ
 出す計略けいりやくとい心付ず、嬉しや本意を達せんと、忠を一圖かたちは像をやつし忍
 び入、よしなき骨はねを折たよき、景清が、心さす敵の頼朝一人、憶病風引こん
 で鎌倉は隠れかゝめバ力なし、女原本多ふぜい五万十萬切て罪作つみり、本
 望のはの字もといかず、先此度にかへるゝ、時節を待て頼朝が頭かみの
 景清が手裡しゅりに在り、かねてなごりをかして置と傳つたへよとえんづ、
 と立出る所へ手の者引ぐし、岩永左衛門どつと押よせ、ふがいな玄近
 經景清をなせかへす、手は餘らば左衛門が受取た、さつま五郎のなきか
 むれ討とめと呼よばはれば、本多の左衛門は打任うちまかせ皆々せいしてかりやと

入、身がゐるゝ出立さつゝ五郎飛んで出な、景清、五郎が計略段々どこ
たへるか、我等岩永様の御影、知行も在付く筈、うら山敷の降参せ
よ、傍輩のよしみ取次で得させんどのゝゑつたり、景清眼をくはつと見
開、ひたかつたゝよふうせた、儕計に殺生も佛も入ぬ手並に豫て知
つらんと大白、黒氣の其勢長刀柄長く追取のべみぢんゝなさんと渡り
合、百宏うの洞の内獅子のあれたるごとくゝてばらり、とあざたつ
る其勢ひゝ岩永左衛門人一ばんゝ逃失たり、主人が逃れば手の者共影
さへみせぬ其中ゝ五郎一人が勝手の知らず度ゝ迷ひ、うろたへ廻るを
引とらへ、せすやうもなき人非人と大地ゝぶち付、しつかとふまへ一捻
ねちてぐつすり、首引抜てつゝ立上り、見れ共かりやゑづまつて手さ
す敵もなかりけり、よしゝこんどゝ遁す共我見込たる一念力、岩も
入、雲も乗、鎌倉山もこもらべこもれ、山をつんざき、岩をわり、終ゝ本

意を達せん物と長刀、小脇こわきをかひ込でえんづくと出て行、道せばからぬ天あめが下、敵を助くる仁者じんしやの道、古主こしうを忘れぬ義者の道、あゆむも道の道ながら誠の道、世々もひく弓矢の道、道をしるべよてゆくゑ、定めずなりよける

○第二

清水や大慈大悲の深如海しんによかい、ちかひを結ぶむすにえん日其佛閣ぶつかくの下がはら、菊水の邊の辻つち講釋かうしやくかんそぐんだん三國志さんこくし、講師かうし關原せきがはら甚内と紙しに記柱しはしらよかけ、紙子の長ながもいきつまりし浜人はまにらしく一こしはつ込、聽衆ちやうじゆを引き受け、んだいよかゝり本引開素讀ひらきすよみする、此時漢王かんわう自丞相府みづからせうぐふに到いたつて迎給むかへふ大將軍を見れば韓信かんしん也、樊噲はんくわいいろを失ふて御車の前まへに拜伏はいふくしてすける、信しんに漂母へうぼも食じきを乞市こひも勝またをくかりし者也、今大將軍も拜し給ひ、項羽かうう聞て大きき笑ひ天下の諸侯しよこうも漢中かんちゆうに人なしと嘲あざけらん、必止給やめへどすけ

れハ蕭何^{せうが}走出^{しゅしゅ}樊噲^{はんくわい}無用^{むよう}の舌^{しか}を動^{うご}すとなかれ、我不才^{わがさい}なれ共丞相^{せうじやう}の職^{しやく}も
ゐて大將軍^{たいしやう}をすしめ、と既^{すで}定^{さだ}つたり、樊噲^{はんくわい}を縛^{しば}て獄^{ごく}も下^{くだ}し給^{たま}はずんば、
諸大將^{しよたいしやう}皆不禮^{ふらい}も傲^{ちやう}とすけれハ、漢王^{かんわう}武士^{ぶし}も命^{めい}じて樊噲^{はんくわい}を縛^{しば}らせ給ふと、
扱^{きやく}昨日^{きのふ}の講釋^{かうしやく}ハかんそぐんだん、五卷^{ごくわん}目張良^{ちやうりやう}がわりふを以^{もつ}蕭何^{せうが}曹參^{さうさん}両
人^{にん}が、韓信^{かんしん}を大將軍^{たいしやう}もなされと進^{すす}すた所でござります、今日^{けふ}ハ其次^{きよ}漢王^{かんわう}
壇^{だん}を築^{きづ}て韓信^{かんしん}を拜^{はい}すと云^い下^{した}、扱^{きやく}只今^{しよこん}素讀^{そよく}致^{いた}いた樊噲^{はんくわい}が人^{にん}がらハ、各^{おのづか}がた
の思召^{おもひめが}は定^{さだ}て色まつかいハ、頬髭^{ほひげ}あれ、我儘^{わがまま}きづいの大力^{たから}日本^{にっぽん}ですさば、
坂田^{さかた}の公時^{きんとき}か公平^{きへい}杯^{はい}が様^{さま}も有ふと思召^{おもひめが}ましよ、中々^{ちやうちやう}強計^{きやうけい}でござりま
せぬ、智惠^{ちゑ}第一^{だいいち}と言^い張良^{ちやうりやう}陳平^{ちんへい}も劣^{おと}らぬ大分別^{たいぶんべつ}者と聞^{きこ}へました、時^{とき}も分
別^{べつ}と言^いハ、此^こ本文^{ほんぶん}のごとく樊噲^{はんくわい}が韓信^{かんしん}を大將軍^{たいしやう}も拜^{はい}なさるゝとは、無用^{むよう}
也^{なり}とめたる答^{こた}、それ縛^{しば}れといふやいやがらり後手^{こうて}三寸^{さんすん}あり、牢屋^{らうや}へ
ついとひいて参^{まゐ}つた、そこで供^くさきかもやつき出^でした、あそこでいぢよ

ひくさこしでいふつくさ、なんぞと聞け、樊噲殿さへあの通^{いんや}、況^{いんや}我等韓信
 を大將軍となさるゝとは無用也と言たらさいと、だまれゝと幾^{いく}千万
 の大將士卒^{しそ}皆韓信が手下に付た、なんと我身一人縛^{しよ}られて大勢の口を
 止め韓信が下知を聞せた樊噲の、力計でない大分別者でいゝとざりませ
 ぬか、尤も聽衆^{ちやうしゆ}も聞取ふねんなく、心うゝあるそらかきくれ俄^{にわか}に一村ふ
 りくれ、やれ大ふりと夕雨^{ゆうぐ}の足もとまらず聞人の、皆ちりゝゝ逃歸^{にぎ}
 殘るゝ甚内只一人邪魔^{じやま}な雨やと夕立の跡はれ渡る講釋小屋^{かうしやく}又人寄^よを
 待^{まち}おたる、ふる雨は、とてもかくてもえのぎなん涙の雨はれまなく凌^{しのぎ}
 かねよし衣笠^{きぬがさ}は、父大宮司^{おやみやうじ}いざなれ親子^{ひとこ}潛^{ひそ}ふ古郷^{こきやう}を出心^{しん}ざす方そ
 んぞよそこ音^{おと}に聞つゝおどの山清水を尋^{たづ}ねりしが、かたへを見れば
 講釋小屋^{かうしやく}に人待ふせい、幸と立よつて是^あ物といふ五條坂はいづくぞや
 あこやと云遊君^{あそくん}の所を知^して教^{おし}てたべ、是はかつれも女中方遊興^{めうちゆうきやう}なさ

るゝでも有まい、めんよふな人をお尋なさるゝな、さればあこやと云
女よあゝいで叶ぬ我ゝ故、尾張からはるゝ尋ね参つたり、はてそれ
の遠方から御太儀千万、是此道を南へ行當り左へ上る道が有、それを一
丁半程いて花扇屋の戸平次と尋、あこやと問、隠がない、是のゝ忝い
去ながら、名も家名も覺よくい筆があらばかしてたべ、いや筆の有合せ
ず、其お持なされた扇子をはなへかふおあてなさるれば、花扇つい思ひ
出さるゝと座興も老の律義も受、此扇をはなへ當れぬはな扇や、できた
講釋なさるゝ程有てとんちはつめい覺たゝ、は禮の重てゝと娘を
いざない尋行、かゝる所へ取たゝと聲高く、權斷所のとりての役人ば
らゝとかけ來り講釋小屋を追とりまゝ思ひがけねと兼てのかくど、
甚内床几をひらりと飛後の高垣こだてゝ取、小屋の柱のふしまちかき
ひね竹取ておしたわめ身がまへし、人たがひか名の誤か、講釋の致せ

共石とらるゝ覺なし上を恐れ奉れば、乃物又手の懸ね共、子細を聞ぬ其
うちあひもかゝらずわけをいへ聞んど八方よりらんで扣たり、こ
ざかしき咎上意を背か、えさいのほ前で直又聞、物ないのせを打すへて
引く、れと一ばん手、えつてふり上つくかゝるさえつたりと飛ちがへ、
ゆがめし竹のかた手をはなせばまつかうよりかたはなかけ、はつしと
はぢかれ眼くらんでたぢく、徒倚迪引かへす、二ばん手のさすま
たを取たとつき出すねらいをはづし、沈んで裾をはねさすれば向ふ脚
をわいたしこ、まつさかさまゝでんぐり返りすきもあらせず三ばん手、
つく棒取のべまいてとらんとつき出す、心得たりと身をかわしつゝと
入てすてつべい、みぢんよなれとえつべいはえきつくぼりからりと投
捨てべつたり、土又つくべふたり、一人がしりの叶ひじと大勢四方を取
廻し、乱かゝるをと共せず脚ぼねかた骨當る所を幸ふ、力有たけ人有た

けのふしをくだき手をくだき心をくだいて凌けるされ共防ぐの只一人、終ゝ大勢ふり重りおさへてなをぞかけよける、物頭半澤六郎成清かけ付れば組の小頭罷出、双方の働具も相のべ目通近く引すゆる、六郎立寄面躰も形かつかう、どつくど見届びつくりし、扱こそくはやまつたるとえたりな、似の似たれ共尋の者もあらず人たがひ、それなとけと有ければ、どり手共きよつと互も顔見合、ときかねて立かねれば、あ、付も共驚く計也、關原、甚内とやらんな懸し間もなくとけといふさぞふしん立べし、我主人の相役岩永左衛門殿、夜前對顔の節和殿が囁下がりらゝて辻講釋する甚内と云者こそ、平家の侍悪七兵衛景清も極つたり、月ばんなれば重忠の手より召どり給へど有し故、某を召れ召どり來れ去ながら、世も似たる人も有そこつのえかたすべからずと仰を受實否を聞つくらふ其内も組の者共手柄を爭ひ此仕合、彼等が

そさうの六郎が誤手^{あやまり}をすりや宥免^{ゆるめん}せられよ、去^いても一こしをたいし
ながら、上^{うへ}を恐れ又^{また}向^{むか}はざる神妙^{しんべう}さ、働^{はたら}のけあげさ奥床^{おくゆか}し、甚内^{しんない}と云^いが實^{じつ}
名^なかなのられよ、ひろうして爲^なあしくいはからいじと、立寄^{たちよ}てあんどき
ほどけバ氣^きもほどけ扱^はいど、あんどしてけるが、飛^とえさつて手^てをつかへ、
是^{こゝ}に却^{かへ}て恐れ入^いたるは詫言^{わごと}、日本^{にっぽん}一の剛^{ごう}の者と聞^き及^{およ}ぶ景清^{けいせい}は似^にたる故^{ゆゑ}、
疑^ぎは預^よりし身^みを取^とて恥辱^{ちじよく}はあらず、重忠^{じうちゅう}の内^{うち}は誰^{たれ}あらん半澤^{はんざい}六
郎^{ろくろう}成清^{せいせい}殿^{でん}、なにといて下^{くだ}さる上^{うへ}何^{なに}を不足^{ふそく}は、一言^{いっご}のお恨^{うらみ}すべき殊更^{しゅせい}身^みの
上^{うへ}は尋^{もと}ずさねばけつく憚^{はげ}有^あは似^にたり、關原^{かんげん}甚内^{しんない}とす、今日^{けふ}渡世^{とせ}のかり
の名^なもて、誠^{まこと}に井場^{いば}の十藏^{じゅうざう}一幸^{いっしやう}とす浪人^{らうにん}者^{もの}一人^{ひとり}の老母^{らうぼ}はこくみの爲^{ため}、面^{おもて}
をさらす辻講^{つちかう}釋物^{しやくぶつ}たべなふとはざる計^{はかり}、世^よは住^すかひもあき身^みのうへ
は尋^{もと}ずよつて物語^{ものがたり}は恥^{はぢ}しとさしうつむき、涙^{なみだ}ぐみて見^みへはける、六郎^{ろくろう}下
部^べは持^もせたる鳥目^{とりめ}十藏^{じゅうざう}が前^{まへ}に置^おせ、和殿^{わでん}古^{ふる}き文^{ふみ}も見^みつらん、龍^{りやう}も地中^{ちちゆう}

よ有時はみづゝ類を同じうすれ共、上天の氣を得る時の勢ひ宇宙
あふると見へたり、今冥人の世渡りは何をしても恥ぢあらず、立身出世の
頃のと随分老母も仕られ、輕少ながら此鳥目老母のかたへ進上す、必
必人違ふ渡世の邪魔せし心付などと思はれそと、聞もあへずいや、
いや、只今一せんでも受てゐ人達の堪忍代となり、謔言の料あど、難
大の口は懸られては、貴公も我も一ぶん立す無用也と、戻さんどせしが
待まばし、老母も下さるゝ志つゝかへしてゐ不禮の至受てゐ快から
ず、何とせんかどせんとあたりを見廻し、それよ――是奉るくはんせ
音、老母の二世をかこし給へどかたへ立たる清水のさんせん箱へ役
こんだり、なふ其義心を見るゝ付彌そこつ面目なや、此旨主人もこん上
すべし又對面せんいざさらばと一禮述て立歸るけんゐゝつものらす誤
を、誤入たる六郎がすなをもちゝぶの家がらを却て譽ざる人はあし、十

藏跡を見送りて、^ア花も實も有^{あり}武士や、万一外の役人ならバ儂^{おのれ}がそこつ
をつしまんど何の分^{わけ}も聞入^{きこ}ず今じふんの後手^{うしろで}ふすかぬまゝ、こんな
時^{とき}に早く歸つて母^{はは}者^{じや}人のお顔を見るが身の祈禱^{きとう}と、一人つぶやき是の
扱、小屋をこはいふ打めいだどちりちろバひし木や竹をひろひ集^{あつむ}る折
こそあれ、深^{ふか}編笠^{あみかさ}は世を忍^{しの}ぶ浪人めけ共ひれ有男、菊水の邊^{へん}は立やすら
ひなふ講釋殿^{こうしゃくでん}と小手招^{こてまね}き、誰ならんど立寄てさしのぞき、是は浪
人様此頃に見へもなされず、けふはくはん昔のほるん日定めては參
りなされふど、けさから心待致した今ほさんけいかお下向^{げかう}か、お聞なさ
れて下さりませ、私を惡七兵衛景清じやとすて、重忠のけらい半澤^{はんざわ}とす
者、たつた今參つて召^{めし}とらるゝ所人違ひは極り歸りしがほらんなされ
小屋も打くだかれ、おこし懸^{かけ}られとす所がないときのとくがればそれ
よそながら見やた、なふ其惡七兵衛景清とい身共がとさ、^ア是の思ひ懸

もない其景清様が何故も去秋お目よりしよりほふびんを加へられ今頃拂底な金銀を、毎度／＼なせ下されたと肝つぶせばいやまだ跡も段々有、一時は肝つぶすまい、今日半澤六郎が召とりも來りしも、自身は形恰好此景清も能似たる故、其似たる故某兼て思ふやう、天下の武將頼朝を狙我なれば却て我を詮議もきびしく用心も又さぞあらん、頼朝は心ゆるさせゆだんを窺ひ討んよ、此講釋師をこまづけのつ引させず腹切せ、景清運つたなく切腹せしむる者也と、書置をそへ置ば、すは景清こそ腹切たんなれど、京鎌倉心ゆるしゆだんは必定其虚を窺ひ討ん物と分別し、折ゝあたへし金銀の、和殿を殺さん命の價と知ざるか、と聞てぎよつとし驚き顔の色ちがへば、いやぎよつとせらるゝな、まだ驚くことが有花扇屋の、あこやが兄の井塲の十藏殿、といへば大ききあげうてんし、さて、私の本名あこやと兄弟と云と、なんとして存なされた

と興きさませせば、面躰めんたい恰好かうかうの似たる貴殿きでんさへ、景清けいせいかど詮議せんぎ有我ありなればさ
 びしさすいりやうを推量すいりやうせられよ、都とも足たりはといめがたし一先立ひとしりのかんと思ふよ
 付、五條坂へ立たてへあこや又出逢であひ、右の段うでをかたれば涙なみだをながし、其講
 釋しやく師し甚内しんないとす、井塲いぢやうの十藏じうざうと云、我兄われあに也なりとの物語ものがたり我も聞きて興きさめしが
 かりそめながらなじみ深く、子迄こくわいたいせし其中そのうち又、今迄いまそれとは
 なせ知しせざりし、其心そのこころで我われとも兄あによの咄はなすまじと尋もとねば、大望おほぞろ有ある身
 の上兄そのあによも心置こころをれ、露計ろけいも知しせずと我われをかバふあこやがてい心を聞きよ
 付、我禍われわざわひを貴殿きでんぬらんと其時迄そのとき思おもひ詰つづ物語ものがたりし、我惡念われあくねん空そら恥はしく一生いっしやうあ
 かめぬ此つらをもへ立たやうふ覺おぼしぞや、知しね内うちのそれもせひあし、知して
 片時へんじも捨置すてれず、こよひ立退のりをあすへ延のびし我心底しんていを打明うちあき、ゑん者ちやうの因よ
 を結むすバンドわさく、是迄この参まゐりたり十藏じうざう殿でんと、思おもひ詫わたる面色めんしよくよ、餘あまりの
 とよあきれもせず、扱あひあこやを不ふ便べんと思おも召方めがたよりと、老母らうぼが万よろへ度どく

のお心付も貴公きこうよな、はつと計はかりまさしうつひき暫しばし詞ことばもなかりしが、
くやしや此ことをゆふべもけさも存ぞんたら半澤はんざくが來きりし時我われこそか
ずさの景清けいせいも成なりすまして、仕様しやうもやうも有あた物おそかりし殘念ざんねんやと、こ
ぶしをよざり身をふるひし目をすり、こする計はかり也なり、なふ其心底聞きこたる故
わいで行いんもほいなさは是迄これほど來きつたり、かまへてく我われとい心のは
しも懸からるゝな、こつがらと云い器量きりやうと云、奉公ほうこうす共安やすかるべき身なれ
共、老母らうぼのまつこを見届みとどんど諸人しよじんも面をさらし辻講釋つじかうしやく三錢さんせん五せんごせんの志
も命をつなぎ恥はぢを忍しのぶ親孝行おんかうぎやうかんじても猶餘なほあり有あわこやがゑんもつ
あなる我われなれば、貴殿きでんの老母らうぼも我母われぼ也なり七十しちじゅう餘あまりり給たまふと聞きこ、此世このよの逗留どくりう
末近まきんし起伏きふふ心を付おられ、着きふるしたれ共此羽織このはおり是を貴殿きでんへ參まゐらす、
今迄これほど送りし合力かうりきは塵ちりづかゝ捨する塵ちりほこり泥どろも投なる石瓦いしかわもふとつて、恩
もあらず情なさけもあらず、是計こればかりこそ景清けいせいが誠まことの心を染そめばふり、朝夕あさゆふかたゝ打

かけ一所より孝行頼入、心せかずの立寄て老母のおめよもかゝるべきが世をも人をも忍ぶ身の無禮はめんどつたへてたべすいふんげんごよ又對面お暇すと立出る袖よすがつてなふ暫心のせんまんどめたけれ共、忍ぶもかつの智略の一つ、えてく落行先のいづく言殘されよ、さればくこよひの上のだいごよ一宿し、其行先は又そこよてのしあん次第と思はれよ、尤、何をいふもここは途中恐れ有、くのまきとは跡より追付き物語、我行迄は必、逗留あれ、是かふくどみしよ口外より誰も菊水の、おどを隔てさしやき合先それ迄はさらばく、ささらば互の目禮思ひずも移る姿の水鏡、それ十藏殿其顔が此つらど、なふ景清殿其面体が我つらど似たでないか、似た段か、思へば半澤六郎が見ちがへたる、いふ、笑ふてわかれける勇者の離別、歎かずといかゝる、ことをや、夕間ぐれ、ものゝあやめも、見ぬあたり、小家がちよとすさみぬる筆の

跡より引かへて町まちのもやうも風俗ふうぞくも、悉ことごとならず見へし五條坂たそがれ、
時を戀こわびる懸行灯あんどうのほかげさへ、白く咲さたる軒のきのつゞ、花扇屋はくせんやと隠かくな
し、家名計けなけいは人めきてあるをどへば戸平次とへいじとて、こゝら名うての横着わうちやく
者色しきと慾よくとを二道にだうよ、かせぎあるきて歸り足表あしうの口よりわめき聲こゑこり
やといつもみせよけつからぬ、たつた今日けふがくれたよどこへすつ込こふ
せつてゐるぞ、竹め林りんめと呼立よびたる下女よめも小めろも所ところすれ、ちけつこあだ
んな様、内はおきやくでてん——まひお料理りやうりよ吸物しつよと、上うへを下へとか
へしてゐるよ、今頃いまごろ戻もどつてうちどの者はなんになれ、お手てがなる、お
林りんちやといてたもと、開ひらがればなんじや客きやくがどれた、町人まちどか二本かくら
ひたい物くらふてすいぢやないかよ、いへ——れつきとまた旅のお方、
お供ともの衆しゆも問とたればおりの國くにの去さおかたこんど京みやこへ忍しのびのほゆき、
内うちかたのあこや様さまを聞及きいたんでのお望のぞみ、隨分ずいぶん馳走ちそうせと現銀げんぎんのしは

らひ、きのふのばんの丁子頭ちようじがこんな小判せうばんも成やしたと、一包指出せばこりやでかしをつた、天晴あつで忠義と金もあふていほや、顔障子しやうじのすきよりなくさしのぞき、固そうしてあこやいざしきも見へぬが、こりやどこも何してゐる、いゑくあこや様ハ晝過から、ぎおんのさの屋へ送つて、それから直すくまいつもの清水参り、ほんよきどくなおさんでと云を打けし何がきどく、嬉うれしがりもしられぬくん音様へ参らふより此おれもなびきおつたらなんぼ程利生りしやうが有ふぞ、いよいとを思ひ出した清水へ逆さかよせして戻る所もとひつとらへ日頃の思ひはらしてくりよと、いひ捨て出る門口へ丁のあるきがすく、何なんどがおこつたやらお代官のお使が、名主様を會所くわいしよへ呼付目のぬける程しかつた上、花扇屋の戸平次をつれてこいといらだての口上、サアちやつとござりませ、サキよとくしいあのつらわいの高がなんぞの云渡し、ちよぼいちはるな畏かしこつた第一の宿

ならぬ心へたと判さへおせば濟とるす宏やといぬかさいで、どうもんぐいな猿松め、サウせおろと先も立ふくれづらして出て行、白波の、よする落ゝあらぬ共、こゝも流のかり枕跡なき夢の、ついさめて、送り迎の、袖の露だてよふつく、あこやとい、浮世もすねし戀のやみ、てらすまのしが挑灯もそれと、印の花扇、あるじがもとよ立かへる、わくのざしきも、待も久敷宵の月、あやしの簾かけ造障子半蔀おし明て、隔ぬ中の親子づれ、前の大宮司通夏、娘相手のきばらし酒、人の氣を汲こめろが酌、お待なされたあこや様今も歸りと知せるよぞ、國元迄も隠あき花の都のお女郎、さあゝ是へと老人のふつゝかあらぬ挨拶も、様子有げの一座とい見て取あこやが胸の中、うねべにだての勤ぶり、ほんも浮世の味な物こんな詫た所さへ、色里の數も入遠い國迄隠なく、あこやを見よふのよふのと心づくしも預る、苦界する身の身も取て、忝い共本望共萬の

といさし置置き、どんでも戻る筈なれど、心も任せぬうきふしとて立破たふられぬ先のさしき、斷ことわりたらば漸やうく今遅おそいゆるしなさんせと、たばこ吸付すさし出せば、女中にきせるいたゞきて花も實も有あ仰、先盃共もずさんが、とゞ様とても自も尋聞わたい分有て、心がせけばと指よりて平家の侍七兵衛景清殿、過につる壽永じゆえいの秋の頃は、一門の供し、西國に下り賜ひしが御身の上ついで恙もなく都又歸りましますと慥たしかな便聞たよりきながら終つひは一度のよすがもなし、そもじのとい兼てより聞て知たる深い中、七兵衛殿のお身の上、ござり所せうも御存ならめ姫ごせに相互ご語つて聞せて賜ひれど打付うち問懸られ、扱いいと彌心いよこもおさめ其お尋もとなんのと、七兵衛さんやら八兵衛さんやら一座流のお客の名、當座ごに覺てゐるせふが跡が跡迄それがまあ、寺方てらかなんどのやうな過去帳くわこぢやうも付てい置まいし、わえや知ぬわいな、とよ深いの浅あさいのと、みぢんこつちも覺おぼえないよ、そんなときとや、や

るせがないとはやり詞でまぎらかす、父の老人をバよりひつ取いや是
の尤調世間存ぜぬおなか女、我胸計がてんしてやぶから棒棒の尋やう、な
んの有やうを答召れふ、かくチ拙者のふはりの國、あつた明神も仕つかへ前
の大宮司通夏みちなつ是成娘の衣笠きさとして彼かの七兵衛がつれそふ女、露程も隔心な
い中、前大宮司通夏とい兼てさたふもは聞有べし、チそんなむつかしい
歌がるたふ有やうあ、永い名は今が聞初、衣笠様でも塗笠ぬり様でも、知ぬと
いふよとがあいとけんもほろふ云はなせば、そんならどふでも我夫
の景清様の知ぬぞや迄ま、さもしいぞや、きたないぞや、さ調すが娼婦うかれめ一
夜妻よづめ小心せうしんふ引くらべて本妻の衣笠が、りんきまつどの氣もあるかど疑うたが
ふての、とぞやの慮外りよぐわいながらあつたの大宮司長袖ながそでと計思ふてか、二こし
さいて武士の行儀ぎやうぎ、其娘の衣笠がなんのひけうな妬ねたみが有ふ、夫の噂うわさのや
りふもない見ると聞とのか女郎ぢやうらうど、心のさげしみ穂ふ出れば猶つとめも勤つとめの

かたぎを見せ、妬^{ねたみ}が有ふが鼠^{ねずみ}が有ふが、知ぬから構^{かまひ}いせねど素人^{しらんど}おなごのくせとして、流を立る身とさへいへばさもしいどのみ心の嘲^{あざわらひ}口へん出ねど貌^{かたち}へ出てはしたない本妻よ、わり、本妻ぞや妾^{てかけ}ぞやとて夫を思ふふ二ツない、其^間思やる夫の行衛いやでもおふでも知さふや置ぬ、こりや新^{あた}しいおかしわいの、めんめの夫のゆくゑを此あこやふ無理ふまれか、まだまら／＼まわの貌わい、エ、つべこべどあゝの口わいと互ふつのる女のいち、たべこのわいそも引かへてふたりがもやす朱煙^{しゆえん}管のきせる、かつちかち／＼灰吹^{はいふき}の口もさ／＼ける計也、折しも井場の十藏^{かもしやう}講釋^{こうしやく}の場の人たがへ、不慮^{りよ}のなんぎを遁^{のがれ}じ上景清が情の程妹^{いとこ}あこやと語らんと心ざしたる宵^よの間の、人目よかざす扇屋の内ふ通れ、下女小女ろ、是に久しふり珍らしいは出ど、いふふあこやが氣の配^{くばり}まりめづかひの簾^{すだれ}ぞし見なれしはわりの紋所、兄十藏と露知ず顔^{おもて}の背

灯火とうしほの、景清と見るよりもわるい所へうとまじと思ふ心と思はず知ず、
まわくこよひいんでくど、かぶりふる、いや此兩人罷歸らぬ、夜が
明ふが日が出よふが尋るを聞ぬ間いつかなとよじらぬ、さゝいど
こなど床とこの間の木枕きまくら取てねころぶぞ、いつ迄也ときこん次第かつて勝手
次第、勝手よくさしきへいさし合ふやと、心を碎くだ云廻し十藏なんの氣
も付ね、次のさしきよ人待顔しまたいなすぞや、えんき、氣よくわぬ
さしきべらくどい勤つとめぬど、すつと立て間の障子しやうじばつたりさすが衣きぬ
笠がさいおぼこ育そだちの氣もよわく何と詞をかけ造下つくりのさしきと隔へだてして心を、
明さぬうたてさよ、あこやい次へ立やいな、時も時折も折ひよんな所へ
景清殿と、すがりよつて、兄様十藏様とさつても似たり横貌よこがたなら形かたちふり
から、爪つめを二ツ其上に此はかり、どふして召てどふしん、貌胸かたなでさする
計也と、さればく似たふ付て、けふは既すでにあふないところ、みよ口よせこ

まゝと暫語る其内は垣間見えたる前大宮司娘引連やあゝ智殿見付すた、お隠有など聲かくれば衣笠も後より、是なる聞へぬ景清様いが程忍び給ふ共、手づから仕立し此はおり見ちがへてよい物かと、身を引まゝし貌を見て、こなたのけふの講釋殿か、恥しとさしうつむき、えびし詞もなかりしが、此はおり召からの景清殿のおゆくゑ、こなたが知ては極りし、わしは聞せて給ひれと頼も又涙なり、十藏も重ねく取違られ氣もとまぐれ、挨拶えどろよあさるれば、いやゝ兄様合點がいくまゝいあなたはな、尾張のあつたの大宮司様お娘の衣笠様、誠有おかたど、常々噂は知たれ共、今の身がらの景清様お爲いかゞと心を隔時の拍子の云かゝり深ふおかくしゆせしが衣笠様聞てたゞ、景清様のほと、今兄様の咄、鎌倉よりのせんごつよく都の住居も折あしければ、暫他國も身をおくすと、暇乞さへ言傳わざ、日陰のお身のおいとしさ

と語るも聞も涙なり、父の老人十歳又打向ひ、景清（即）のはや京地（みやこ）を立退（たてひき）、ゆくもさだか又知ぬとなべん、と尋（もと）あるくも正眞（しやうじん）のやみ又礫幸（つよて）かな其元の形恰好景清又似たる上定紋（うやうもん）のすわりたる其羽織（うよく）を着されし、我神道（しんだう）の一跡分身（たいさんしん）取も直さぬ七兵衛景清、此前大宮司が逢（あひ）たい用事外ならず、娘衣笠又暇をくれ、ふうふのゑんを切てたべ、頼（たの）ずとさし付と思ひこんだる一通聞て驚く衣笠姫とし様それは何おつゑやる、お心の乱るゝ程は酒の上らずそもやそも俄（にわか）又狂氣（きやうき）もなされまいが、ふうふのゑんを切そふとの國元（もと）でおつゑやつた、お詞とは天地の違（ちがひ）わゑやつんどがてんがいかなぬ、がてんいかな筈、都（みやこ）は上（のほ）り夫を尋ね連歸らんといふたいな、此父が虚（うそ）をやわやい、世はなき平家の討もらされゑ、ゑんをつなぐは身の滅亡（めつぼう）切腹（せつぷく）か遠島（えんたう）は鎧（よろい）にかけていやしのゝ、義理も情（なさけ）もせなかつ腹と云ふ悲（かな）しとやる方（かた）なく、日頃の義理も恵（めぐみ）も有父上と思ひ

くらせしよ、いつの間も其やふなひきやうなふ氣も成給ふ淺ましきよ
とかきくどく、ヤぐどく、と叶ぬと是でも非でも景清もゑん切そふ
と極めた胸變せぬが神道の第一、景清の一鉢分身、娘笠衣も暇をくれ
めさ。一家の因が切たいと詞するどよこねかくる、十藏もぎよつとせし
が、よつくい心底恥かして腹おんど、神道の一鉢分身面白し、我世渡
りの軍書の講釋、樊噲をかたれば樊噲が魂張良をどけば張良が意其理
を以て七兵衛景清が、性根も成て返答すると老人が願さき、顔つき付ては
つたどよらみ、神の非禮を受ずと云ふ穢不淨の魂もて、つらのかはのあ
つたのかすねぞ、そつちから望まいでも、こつちよそのぬ女房去た
と詞もひかぬよ衣笠姫、すいさんな十藏澤山そふよ人の女房、さつた
くどまこなし貌しやほよかかし、よるもく、氣違の有條此衣笠の
相手よならぬぞ、相手よならふが成まいが舅が心見さげし上り、男のか

うけ離別りべつく、此父が吞込からはいかまもさつぱりゑんは切た、いゑ
へなんぼおしやつても、景清殿のこんりんざい我妻、かふ言たらてつき
りと勘當、親子のゑんをきらうで有ふが、親子のゑんを切ふより此首切
て下さんせ、夫故又ゑぬる命ちり共灰共思はぬ、是程又思ふのみ、景清様
の返答へんとうい、どふで有ふ講釋殿かうしやくどのと理ことわり責せめられて十藏も、感ずる心又面を和
らめ、でかしたり女房共、其心底しんていを聞ていどふも去れぬ、やつぱり元の
めうとく、いやこな男のぐれりくど心のそろぬ、景清、一たん男が
もらふた暇、いやそう言ても約束やくそく變がへ、そふでござんすいつ迄も縁
の切ぬ、いや此親がせひはらすいやさらさぬと三方ろんぎ更さらはてし
もなき所へ會所くわいしよを戻る主の戸平次、いつまかわりてぐんより首十方
よくれし其ふぜい、えあん中戸よさしかしれば、かくみの三人せり合聲
大宮司の景清のと、囁ささやちらりと聞みし立はな息もせず伺うかひある、内に

かく共まらがの父いつ迄かくと争ても、せんなきと詞をやわらげ、十藏殿あこや殿、我一通を聞てたべ衣笠もよつく聞惣じてせかいの女の子は生れし親の家を離、夫は任す身の上なれば子とても親の儘ならず、去よつて親のどがを娘よかくる法もなく、娘のどがの勿論、親の身よかしらぬと、天下一統の式目、景清を智え持たるとて鎌倉殿の御咎有べき筈なけれ共こゝよ一つの誤の景清西國へ赴時、節戰場迄女をぐせんもいかい也、預け置んと頼し故、今のなんざの氣も付ず、うかくと預り置疑かゝる聾のゑん、一生の不調法くやしいとをしたなあど、わつたる茶碗をついで見るよひとしきぐちよ立歸り、そゞろよ子供のかあいさふびんさ、鎌倉殿の崇よあはいいか成うさめよあはんも知ず、忍ろしやと思ふより所詮我身の義心を捨、衣笠よゑんを切さば三方四方の爲よしと思ひ誥たる老のゑあん臆病者の義理知ずと、笑ひば笑へ十

其の爲、弓矢取身もあらず、長袖ながそでの身玄や者と、得手勝手も分別極め、生れ付のかたいぢどかしは是程迄のやり付しは、娘が誠の心底よかに入たる今日の景清殿、尤この思ひながら父が心も思ひ分て衣笠を去てくだされひ、恨はなを捨てお頼みすと神は仕ゆる身ながらも、子故の道のみ迷ひ胸のいれどを引立て、どこやみの夜と知れける、衣笠の猶悲しくお年の扱もよせまい者、それ程迄はお心の愚おろかも成者か、親を人々笑わせて子の身として嬉しからふか、思ひやつても下さんせ、それ程のと辨ぬ某ではなけれどな、儕等が爲世話いるは親もちがふどうばかり者と、氣をもみいらつ老泣おなまたぐり上たる持病ぢびやうの痰火たんわせき上くせき入バ、それくそれがお世話かうとまじのかたいぢやと背撫せなでおろしまあわれへともとの一間へいたれば、十藏兄弟明た口ふさぎかねてぞあきれゐる、今迄まほれし戸平次が様子を聞て氣にいそく是のあこ

々の兄公あにきよい所へよふわせた、二人ながら近ふよりや一大事の談合だんがみが
 有、先高がかふ玄やの代官だいくわん所の侍が會所くわいしよへおれを呼付よび抱かかのあこやを此
 方へ渡せ、景清がありかを賣せうさいあんていすど云た、談合といこゝの
 と、あこやよふ聞てたも兄公あにきの前で云よくけれど、どふからそなたまほ
 れてゐるの、其人をいとしなげよ賣せうふと云所へおつと云てどふやられ
 ふ、其上またつた一人の奉公人、花代なしとやしきへやつて、口を天井てんじやう
 へ釣つりて置屋しやうばいの商賣がならねば、呼屋よびの衆も迷惑めいわくそこで味あじをやつたの、い
 るゝ此方のあこやよふそんな客のござりませぬ、其上どふから私が女
 房にようば引上、今で勤つとめいさせませぬとぬつべりとやつたが、代官だいくわんも賢かしことかく
 あこやをつれ参れ直じき尋ると手詰てづめのせんど、こゝが談合の要所かちめどころよふさ
 きや、是を幸よおつと云て女房にようば成てたもれば、景清がせんど、こゝそもじ
 ゃいかしらぬの、兄公あにきそふぢやないか、それでも代官が吞込ぬか、そこま

ムツの上分別こゝが又談合の要所、あれ今かくへいた大々しが、娘あを
やがかはりよこいつをとらへてはせんさくなされませど、訴人またら
ほうびのすくなく、錢十貫、それを元手、めうどづれで、さんごまて遊
んだら面白かるで、有まいか、十藏殿は小姑妹、簀の戸平次が講釋さし
ても置まいぞや、此談合いやかおふか、おふなら極樂いやあらぢごく
どふぞや、と氣をいらつ、二人のめませようなづき合、是んだん、
尤のほ分別、なんの是が談合所あつとせ、妹、花扇屋のお内儀様と、氏
なふて玉の輿、ときほふて見すれば、兄公、い合点、いや見かけ、似合
ぬ、埒明、あやのいの、あてやどふしやる、さればいなわし、あやとて木で
も石でも作らぬ身、まんざらよくふも思ひねど、兄様や母様の、心を今迄
きがねの遠慮、おつと讀た皆迄云まい、そんならめうど、成氣、あやのは
て、兄の十藏が水入すのなかふど、はんよそふぞや、いふて三人打て

置、玄やんく、シ、おくのお客を逃さぬやうふ、馳走や玄や女房共、たつた今會所へいてほうびの十くいんかたげて戻ると、獨が胸さん用はき違たる足もどい、草履下駄やら雪駄やら心も付ず走行、十藏跡を見送つて、是く妹、一寸のふれバ尋延ると偽の偽つたが、宿の仕廻い玄あんが有か、兄様より似合ぬあんじ、此間も衣笠様いづくへなり共おとしまじ、代官所へいいさぎやふ此あこやがとらられて、責殺されるが責てもの景清様へ心ざし、わしもお前の妹じや物、でかしたり神妙也其心底を聞ばあんど、某の今宵の内景清も追付きくだんを語、一時も早く都を退さん、落付所いあるべ有てど、かたればちやくと兩のみしと手をおしめて、是く景清様の落付所わしと聞せて下さんすな、聞まいと云其心い、いか成火水の責あふ共性根乱ぬ其内い、かくしぬかうと思へ共、心の底も覺あらバ身のくるしさも氣もより、口走るまい物でもあし、

わゑやそれが悲しさゝ乞求こもとめても聞たい知たい夫のゆくへうの空そら、せ
かいの女房の風上かざうへゝも置れぬわしゝゝゝ人、お中ちゅうかゝやどした此や
やも能よゝのこゝう人、あれと思ふて下さんせと忍び、涙ぞはてしなき、十
藏も心根を、不便とゑほるゝ氣を取直し、最前の詞ことばゝ似ぬみれんの歎
ゝ隙ひまとりて、衣笠様ゝあやまちあらば心の操みさば皆むだと、ぬかるな妹十藏
ゝはやいくぞと、跡あとゝも心残れ共先も恩有義理の道、立別てぞ出て行、あ
こやゝ思ひの、胸押むねおしさげゝ、我ながらぐち涙、なんとして泣たぞと心こゝろゝ心
恥はぢゑめて、かくの一間を窺うかがへ、はや表うへゝ挑灯ちやうとうの光もけんぬのはいゝ
はい戸平次ゝ先まづゝ立鬼たてきの首くびを取たるこゝち、女房共ゝゝあこやゝゝこ
ゝぞ、代官様がお出でゝや奥のお客きやくゝなんとしたと、とへど返事もうろつ
く内、庭にわゝ入込代官いりこひがさも押柄おしへゝいかつ聲こゑ、あつたの神職しんしやく前大宮司みちやうし通夏とうちや
ゝいづくゝ有、かく云ゝ岩永左右衛門が家の子荒木源五あらきげんごと云者、は邊へんの

娘衣笠惡七兵衛景清も、えんを組くむか尋者の一ひとりい、尋問もと子細有急ぎ此方へ渡さるべし、ぬはいあらばりふじんもふんごみなわ打てつれかへる、返答へんとういかんと呼よわつたり、前大宮司通夏少も驚く氣色けしきなく、刀ひつ提娘をかこひえづくと立出た出で岩永左右衛門殿の下知として、我娘衣笠を召よつれて歸らんとい、景清がありか尋ん爲なさ、それならば無用もあされ、西國落も別てより景清が行衛ずんど存ぜぬ、隙ひまつぬをいんより立歸つて此通、岩永殿も聞されいはれは太儀ふぎで有たなど、嘲詞あざけりもあら木もひとつとし、知ぬとて知せず置ふか、それ戸平次引立いと云ふあこやがいやく、ああたがは存ないと云せうこゝわしが立、かんまへてれうじせまいぞ、親方の戸平次殿と云ふびつくりけうと貌、こゝやどふぢや女房共親方どのなんのとうろたへたか女房共、いやらし女房とは誰と、五條坂のあこやい景清が妾おちひものと、せけんも隠ない中を人

聞のゐるい女房呼り置てもらそ、其筈ぞやあるまいがな花扇屋の
お内儀は打て置えやんくを忘れたかなことの兄いどこへいた兄公
兄公どうろたへ眼源五よつたり行當るをはつたどねめ付あこやを
女房とは大きな偽、偽迎も遁さぬやつ、此上二人の女つれ歸つてがう
もんする、大宮司娘を渡され、忝くも鎌倉殿の代官、岩永左衛門が下
知を受向ふたる某、身不肖の侍と侮てあこくひ違後悔はしせらるゝな
どけんゐるゝ任すりくつ詰、返答もせず默然とえべしえあんにくれぬた
る、人よ計物いせうん共すん共答ぬは、銳意を嘲どが人其方とても
遁しいせじと、詞あらゝゝ責かゝる老人はつと息をつぎ、膝を打て、そ
ふぞや、ぐちゝ歸つた老ぼれ今めがさめたと持たる刀、娘の前ゝ投出し
儕も前大宮司通夏が娘ぞよ、父が今迄立ぬいた片いちむだとよせぬや
うよ、がてんしたかうろたへなと、いぜんのみれんゝ引かへて詞も涼し

き目の色も、衣笠刀押戴親おしいたぎのゆづりのかたいち、受つぐの娘の役、其かた
いちを見て置と、すらりとぬいて戸平次がかた先ずつばと切さぐれば、
うんとおつけも伏ふしながらたゆまぬ剛氣がうきもむしやぶり付、源五もさすが
武士ぶしの投、刀も手をかけさくゑんふせい父はすかさず押隔おしへだりごさわが
れな侍、其元の相手もは此し腕うでとつば本くつろげぬかばきらんず
いきほひも氣を吞れてぞひかへゐる、戸平次は深手ふかてながらしがみ付ん
と身をもがく、おこしも立ずのつかしり、ぐつとさいたるといめの刀女
わざもはかひなく、大宮司おおくみじ聲を懸、父が讓ゆるのかたいち、是迄に見届たり、
して其跡はなんとく、此跡はかやうも持たる刀のきつ先を咽のども
がいとつき立る、さなくて叶ぬ筈、死しにそこなふなりつばよせよと、
またときもせず守りぬる、衣笠顔をふり上て、有がたや父上の、みれん
のお心ひるがへり勇ゆうのお顔見て死しにれば、親子のゑんも切ぬと云、大宮司

が娘こそ景清が妻也と、末世末代いゝるゝ我身の上の諸願成就神の
教の高天が原、佛の道の極樂淨土よ今ぞ赴嬉しさとくるしみつゝむ笑
貌あてやいせんかたうろ／＼涙、手負の次第又息より今こそしやバ
のたそがれ時、終よりしほむ夕がほや、五條あたりの白露と消行身こそ
はかなけれ、父の歎の色めもなく、口論よよつて戸平次を討て捨たる娘
の衣笠、玄がいえたればさん用すんだり此上よも云ぶんあらべとよが
り切たる面色よ、相手とし死る上、此方又構ぬとど、歎きよ沈むあこ
やをとらへ物をもいせず引立行、大宮司のほいなげよ見送つて死が
いよより、娘でかしてくれた去りどていよふしんだ、さうぬ／＼戸平
次め、よふ訴人しおつたな、よいきみなめよあひおつた、去どていよふ
切たぞ殺したぞ、此親が老よほれ子よ迷ひ埒もない分別ちがひ恥の有
たけ吐出したよ、おとが死でくれたので魂がさつぱり、景清殿のおきゝ

やつたら嘸^{さぞうれし}嬉^{うれ}かるほうびであろ、今のりつばなさいこの躰^{てい}を見せぬが
残り多いわい、けなげな娘^{むすめ}を持たと思へば心がいそ／＼するのやいと
死骸^{しかい}をしべしおし動^{うご}かしほんよそなたはしんだもの、生^{なま}てゐる者のや
うよくよくとよまいごと、まだぐちみれんが直^{ただ}らぬとしかつてくれ
お笑^{わら}てくれな、もふとふもこたへられぬ、一生^{いっせい}のみれん納^{おさめ}心のたけをな
かせてくれと、たゞへ／＼し涙^{なみだ}の溜^{たま}りわつとさけびてどうと坐^ましぜんご
ふかく見^みへけるが、ハッア^副そふじや誠^{まこと}よそうじや、娘^{むすめ}がさいごの一ごんよ
我身^{わがみ}の納^{おさめ}を知らせしな、浮世^{うきよ}のちりよ交^{まじ}りて神^{かみ}よ仕^{つか}ゆるよひもなし、
神道^{かみち}より佛道^{ぶつち}よ赴^{おもむ}く手本^{てほん}の聖德太子^{しやうとくたいし}、今^{いま}より法^{ほふ}の修^{しゆ}行^{ぎやう}よ出^い四天王寺^{しやうてんわうじ}よ
参詣^{さんぎ}し諸人^{しよじん}よ勸化^{くわんげ}をすゝむるこそ娘^{むすめ}がぼだい我身^{わがみ}の爲^{ため}有難^{ありがた}し／＼と
差^さぞへぬいて警打^{しやうだ}切^き末^{まつ}打^{うち}立て立^た出る、か程^{ほど}涼^{すず}しき佛^{ぶつ}の道何^{どう}とてあつた
の神垣^{かみかき}と、隔^{へだて}のあらじ此世^{このよ}の迷^{まよ}ひ波羅伊王^{はらいおう}意喜余目^{いきよめ}出^い玉^{たま}も利益^{りやく}の、同^{どう}じ

むむおみだぶの六字ハ、六根清淨とさとり行身ぞ頼もしき

○第三

覺の脛短しといへ共是をつがバ憂なん、鵠の脛長しといへ共是をたゝ
バ悲なん民をせいすると此理もひとしされバ治る九重も猶も非常を
いましめの、水上清き堀河は所當時鎌倉の嚴命もしたがり、秩父庄司次
郎重忠さんりまゆこの代官として、兼ては民の公事さいばん私のはか
らひなく、道よくもらぬ十寸鏡智仁の勇士とかやけり、同席も相並ぶ
岩永左衛門致連、南都東大寺の建立よりすぐさ都も押留り、重忠の助
役どがうし惡七兵衛景清が、ありかをさがす邪智倭奸表の忠義も見せ
かけて、おのがいこんをさしはさむ心の底の二股竹、どらの威をかる狐
とい、きよろつく面もあらわれたり、當日の取次役兩人のほ前も出、清水
の轟は坊は出也と披露もつれ大廣間より入給へば、はやく是へと請

ぜらる、法印重忠ほういん じうちゅうも向ひ給ひ、平家へいけの侍七兵衛景清しちべゑ かげせい、轟坊とほうぼうも入來らば、擲取ちやくくて出せよと先達さきだちての御使者ししや、尤平家盛さかんの時節ときふしに、彼景清かれ かげせい、くゝん音を信しんじ七十五里さかひの境を隔へだてし、おはりの國より日參さんせえ、世の人の知所、然るも壽永じゆゑいの戰いくさも西國へ赴おもむき、それより音信いんしん不通つう、よしんば忍びて、觀音へ參詣さんぎを致すもせよ、出家法師しゆめつけ ばうしの手も及ぶ彼かれもあらず、からめどらるゝ子細しさいあらば、それこそ武家ぶけの役、出家しゆけも不相應さうおう、此義を辭退じたい申さん爲の參上さんじやうと、憚る色なくの給ふもぞ、重忠ふしんの氣色けしきバみ岩永左衛門詞をすし、みみ、いは是こゝに秩父殿ちちふの存ぞんなきと、某が存付ぞんぷもどより、坊ぼうに景清がだんな寺、心をゆるし參詣さんぎせまい物でなし、所をだます手あしとやら、からめどつて出されなば、ほうびにいつかどお寺の爲と存るからど、いんせも果すこいけしからぬ、致連おれつらの仰おほし、我眞言われしんごんの密法みつぽうに五輪種子ごりんしゆし、周遍しゆへん法界ほうがい、鬼畜きちく人天じんてん、皆是大日だいにちと説とれて、廣大無邊くわうだいむへんの大慈大悲、景清來つて我

を頼まば一命もかけてかくまひのすども、からめ取て出すなどとは耳
ふるしも穢^{けが}らひし、よしそれが曲^くどして没^{もつ}収^{しゆ}せられば傘^{かさ}一本、沙門^{しやもん}
の身よいとはぬとと詞^{ことば}を放^{はな}てやするれば、岩永も云がしり、サねちくさ
い老僧^{らうそう}大日^{だいにち}やら大ねつやらそれは存ぜず、景清がした持達後日^{きつと}は
さたふ及^{およ}ばん、既^{すで}ふ以^も近い手本は五條坂の遊^{ゆう}君^{くん}、あこやと云女を六ばら
ふ引出し、景清がありかを尋る毎日の拷問^{がうもん}、きのふ拙者が承はりけふ
は是成重忠の當番^{たいばん}、家來^{けらい}共ふ云付憂^{うれ}めを見すると云と京中^{みやうちゆう}は隠れなく、
則^{すなはち}其松をあこやの松と、異名^い迄^{いた}付る程の大^{おほ}せんぞ知られぬと云と有る
まい、とふよらば法師の身とて拷問^{がうもん}せまい物でなし、轟坊^{ごうぼう}を引かへ驚坊^{おどろき}
ふしてくれん、サよえないお坊^{ぼん}ふかゝつては用共を怠^{おこた}るとさしたると
もなければ共仕廻^し付ね座を立て次の一間ふ入ふける、重忠法印を近く
招^{まね}き、景清^{かげきよ}がせんぞのと、重忠が胸中^{けうちゆう}口外^{くわい}ふ出さぬとあがら、貴僧^{きそう}は格別^{かくべつ}

あかしやさん、平家の方よりも誰彼と名有弓取り多き中も、彼景清の一人
 當千あつたらえきものゝふ假からめとればとて無下の一命を斷べき
 や、何とぞ彼が心を和らめ源氏の幕下は付置ば、勇者の胤を日本は永く
 残さん國の實、臥龍先生が孟獲を七度迄助けかへし、終は蜀のみかた
 とおしつる例をまねぶ寸志の忠義景清され入來らば、此道理を演説
 有て源氏に仕へ存命せよと、諫の教へお僧の役必頼み存ると、敬ひ深く
 の給ふよぞ、轟は坊はつとのかんじ、今も初めぬ秩父殿の仁愛、一見阿字の
 佛教も外ならず覺さふらふと、歡喜の領掌おし給ひ、はやばいともぎど
 ふ、出家かたぎの濁なき清水、さして歸らるゝ、ちぶの郎等、榛澤六郎
 成清遊君あこやを拷問の時刻も限る未の刻、六波羅より立歸り、門も
 へろす囚人かご、簾を上て引出す、姿いだての襦や、いましめのなは引か
 へて縫のもやうのいと結、小づま取手も儘なれど胸のほどけぬ思ひの

色形かたちのはでゝ氣きのまほれ筒つつゝ生いたる牡丹ぼたん花はなの、水みづ上うへかぬるふぜい也、榛はん澤ざい六郎ろくろうは前まへより出で仰おほゝ任まかせなりをゆるし、様々さまざまなだめ不便ふべんを加くわへ尋問どんもんいへ共とも、なんぶん景清けいせいがゆくゑ存ぞんぜぬと計けい、外ほかより口くちも是こゝき故召めしつれていと、披露ひろう半なかば岩永いわなが左右衛門さうゑもんつかゝと立出たちでゝ不念也ふねんや、榛澤はんざい科人かじんふなりも懸かず、其上かみ見れバ拷問がうもんゝつかれたる氣色けしきも見へぬが、聞きこへた、扱あひは邊へんがけふの拷問がうもんなまぬるくやられしな、よいゝ明日あしたの拙者せっしゃが受取うけとり、そふゝ家來けらい任まかせも成なりまじ、自身じしんの手並あみ見せつけ、景清けいせいがありかはさかしてみせふ、侍共さむらいどもやいあの女め岩永いわなががやしきへ引ひと、れいのそこつを重忠しげただ押おとめいや先待さきまちれよ岩永いわながなりをゆるし拷問がうもんをゆるめしも、榛澤はんざいが私わたくしならす某それがしが了簡りょうげん其上かみより今日のくれ迄いたひ此方こなたのはからひ其元そのもとのお構かまひない筈はず、入ぬせむは無用むいようゝ、こりややいあこや、今日けふもまだ白狀はくじやうせぬよしは、て扱あまぶといなせいのぬ、去さながらそれもなわ無理むりとい思おもひぬ、義理ぎりと

情あさけを表あらわふ立たるが遊君ゆうくんの習ならひいかゝ賣せらるゝがつらいとて、なじみを重ね
 た夫その行衛ぎやうゑつゐおふ共明ともあされまいさ、さあきだゝ流ながれを立たる女を、誠まことなき
 者と一ひとむきゝ心こころへしやからもあれば、それらが識しりもうたてく思おもひ、又また
 同どうし憂伏うきふしを勤つとめる友傍輩ゆうぼうはいの顔かほよこしなどと思おもふてのとならんが、こゝを
 どくどがてんせよ、景清けいせいがゆくゑ、存ぞんすべき者ものなればこそからめ取とてせ
 んぢもする、有あやうゝ白狀はくじやうすれば、忝かたじけなくくも鎌倉殿かまくらどのの御意ごいを安やすんぢ奉ほうり天
 晴てれのに奉公ほうこう、万人ばんにんの識しりを受うても君一人きみひとりの心こころゝ叶かなへ、其身みみの冥加みやうがあしか
 らまじこゝを能辨わかまへて、サアさつぱりと景清けいせいがありか、此重忠このしげただゝ聞きこせいと物もの和
 らかゝ理ことわりをせめて、然しかもこたゆるせんぢの詞ことば、あこや聞きこてさつてもき
 びしい殿様どのさま四相しさうをさどるに方つねと常とこに噂うはさゝ聞きこたれど、あんの子細しさいらし
 い四相しさうの五相ごさうの、小袖こさうゝ留とどるきやらぢや迄いたどあだ口くちゝ云いながせしが、け
 ふの仰おほよかゝおれた、勤つとめの身みの心こころを酌くみで忝かたじけなくいおつぢやりやうなんく

のせい文で、景清殿のゆくゑ知てさへあるならお心もほだされ、ついに
んと云てのけふが何を云ても知ぬが眞實、それとても疑はれずバ、い
つ迄も責られふわいな、責らるゝが勤のかいり、お前がたも精出してお
責なさるが身のお勤、つとめと云字も二つない、浮世でい有ぞいな
と、云ふそばからこらゑぬ岩永、サベリくとはつしやいだおど骨せひ
白狀をせぬと置いて、此間の拷問も品をかへて憂めを見する、聞ばうぬ
にくいたいと、な、よいく急度思ひ付た腹も子の有かきみの格、搥煎
買ふしてくれふと、おどしかくれバ、そんな、とこいがつて苦界が片時
ならふかいな同じやうと座もあらんで、殿様顔してござれ共いさかた
の雪と墨、重忠様のはからひとて榛澤様のけふのせんぎ、なんも懸す責
もなく六はらの松陰まで、物ひそやかと義理すくめさまゝ、といった
りて、景清がゆくゑのと問れし時の其くるしさ、水責火せめいたゑ

ふが情と義理とみひしがれて、此ほねくもくだくる思ひそれ程せ
つないとながら、知ぬといぜひもなし此上のお情なり、いつそ殺して下
さんせとくんと投出す身のかくごもて餘してぞ見へみける、重忠榛澤
を近く召れ、か程心をつくせ共、誠を明さぬ上から目通で拷問せん、そ
れくとい仰有詞の尾は付岩永左衛門、やあく者共、あこやめは水くら
いず用意くと呼めるよぞ、あつと答てしらすの内あをす梯子を見る
よさへ、心のぼる枕の横槌、底のかたへの井戸やかたふかくもきしる
絞車の、胸はひいてきて氣をひやす、あこやが心の濁水今しも吞やどかく
この躰、重忠庭より立て、ぎやうくしえづまれく、あこやを拷問
の責道具、某かねて拵置たり、誰か有持參せよと仰は随ひ持出る、最
もやさしき玉琴は三絃胡弓取そへて、ねじめも嚙とえらす成、あこやが
前はならべ置、岩永もぎよつとせしが様子いかいと打守れば、是は女、其

琴ひけ、重忠が是よて聞と刀を杖よおとがひもたせ、岩永殿もお聞あれど、打どけて見へければ、こりや何ぞやけうがるは、責道具くどさんぞきびしいとかと思へば、聞へた拷問よとよせ自分の慰氣ばらしをやらるゝな、天下の政道を取さばく決斷所での琴三絃、韓武以來あゝ圖なほたへ實誠せかいの有さま、天又口おし人を以て言しむとい今思ひ當つた、あこやめがくわいたい、もしもや此子が女の子あら、琴でやぐはんく三絃で、なんとやらと京中が諷ひしは此前表、此上のばれ次手、ちよちよげ、なんともよござんえよがのべ、と嘲哂す、重忠耳よも入給ず、あてやなせ初めぬ、琴をひかねば景清がありかを、いひ明す所存かど詞もまげき重忠の、底の心い知ね共せひなく向ふつと琴の、行衛を何と岩越よいとも心も乱るゝ計、聲も枯野の船ならでかひなき、しらべかきならし、かげと云も、月のゑん清しと、云も月のゑん、かげきよき、名のみよて、う

つせど、袖もやどらず、重忠^{おもたけ}みしをそバだて給ひ、今、彈^{たま}ぜしは、落組^{おちぐみ}のしやうかを我身の上より取、景清が行衛知ぬとな、まゝあ知ずんば知ぬよせよ、まて景清と其方が馴^{なれ}初^{はつ}し、いつの頃、いか成とのゑんより深い契りの中より成しぞ、是に又思ひよらぬか、いつたのお尋、何とも昔となる恥しい物語、平家の代^よと時めく春、馴^{なれ}よし人、山鳥の尾張^おの國より永まき、野山をこへて清水へ日とくのかちまふで、下向^{あが}も参りも道にかゝらぬ五條坂、互に面を見知合、いつ近付も成共なく、羽織^{はおり}の袖のふへろびちよつと、時雨^{しぐれ}のからかさ、あまいは用、雪のあしたのたばこの火、寒いよせめてお茶一服^{ちやく}、それがこふじて酒一つ、こつちも思へばあちらもくどく深い観音經^{くわんおんきやう}、ふもんぼん第二十五日のよさ必とたふれ、の詞を結^{むす}ぶなごや帯^{おび}おはりなければ初もない、味^{あじ}な戀路^{たのしみ}と樂しむ壽永^{じゆへい}の秋の風立てず、まやあかしのうら舟よこぎ放^{はな}れ行ゑんの切め、思ひ出

すも瘡かさのどく、うとましと語りける、さも有なん情の道、聞届しがせ
んぞの濟すまぬ此上の三絃さんせんひけい、いやは此方の尋る子細を、聞ぬ内い
つ迄もど、猶望まるゝ三絃のどふ成とか知ね共、思ひこんだる探みさほの糸今
更何とたがやさん、心の天柱てんじ引ゑめて、すいちやう、こうけいゝ枕ならぶ。
る、床の内なれし、ふすまの、夜すがらも、四ッ門かどの、跡夢もなし、去ゐても我
つまの、秋よりさきよかならずと、あだし、詞の人心、そなたの空よど、詠うたむ
れど、それぞと問とひし、人もなし、もふよいの三絃やめい、班女はんによが寐ねのかこ
ちぐさたへし契りの一ふし、時又取ての一興けいながら云分わけにくらいく、
西海の合せんゝ命を遁のがれ都ゝ折々さざれ紛入景清、そちの度々あゝふがな、平
家盛さかんの時だゝも人ゝ知られた景清が、五條坂のうかれめゝ、心をよす
ると云いれて、弓箭ゆみやの恥と遠慮えんりよがち、殊更ことさら今の日陰かげの身、わたしゝもどよ
り河竹かわたけの有が中ゝもつれない親方、目顔を忍ぶ格子かかしのさき、編笠あみがさごしゝ

まめも有たかア、お前も無事よとたつた一口いふが互の、ひよくれんり
 さらばと云間もない程よせのしない別路の昔のきぬ、引かへても
 めんくんと落ぶれし、身の果哀れな物語、おはもじとさしうつぶく、い
 かさま是にかくもあらん、景清程の勇士なれ共、實は色にまゐんの外、し
 あんの外、どふしあんな仕直しても此通で済されぬ、それ胡弓すれく、
 あいとこたへて氣に張弓歌の哀を催せる、時の調子も相の山よしのた
 つたの、花もみぢさらまな越路の月雪も、夢とさめての跡もなし、あだし
 のし露どりべのしけふりのたゆる、時しなき是が、浮世の誠なる、誠をあ
 らはす一曲も重忠ほどんどかんよたへ、あこやが拷問只今限り、景清が
 ゆくへ知ぬと云ふ偽なきと見届たり、此上よの構なしと、仰あこやの
 涙盡ぬお禮を伏拜、重忠、白い共黒い共片付ぬせんぞを、あこやめ
 ん偽なしと何を以てする、此岩永の吞込ぬ不埒くと云はくす、

其子細いふて聞ん、鼓つづみの五聲ごせいも通つうせずといへ共、糸竹いとたけの調しらべの五音ごおん四聲しせいもよく通つうじ直ちかきを以てうしとす、曲まがり僞いつはる心を以て、此曲ききょくをなせる時は其音色ねいろ乱れくるふ、なかんづく此琴このこと、音有物おんあつものの司つかさどとして人の心を正ただしし、邪よこしまを禁いさしむると白虎びやくこ通つうも賞しょう玄置げんちたり、こゝを以重忠じゆうしゆうが、女の心を引見る拷問かうもん、十三の絃ひとすぢもえばかりからめて琴柱ことじよく、科がの品しちゆうより十迄と斗と爲いぎんずるをひがととはすされまじ、琴ことの形かたちを堅たて見ればみなざりおつる瀧たきの水、其水をくれる心の水責みづせ三絃さんせんの二上りも氣を釣上る天秤てんびん責せめ胡こ弓きうの弓のやがら賣うと品しんをかへ賣うれ共いつかな乱るゝねぞめもなく、てうしも時もあひの手の秘曲ひきょくをつくす一ふしと彼かれが誠はあらわれて、知ぬとは知ぬも立しらべをたゞして聞取たるせんぞの落着らくちやく、此上もふしん有やと道理も叶ひし詞のしらべ、びん共しやん共岩永いづみの、ばちびんあたまかく計はかりまゑめも成ぞこゝちよき、重忠じゆうしゆう重て、あこやがせんぞ落着らくちやく、

といへ共、猶此上も某が尋問子細有、障分いたなりやしきへ引ど、仰を蒙る様澤六郎いざあこや立ませいと、友なふ情數々の恵を思ふ女心、有がたふ存ますと、詞もつきぬ悦び涙、岩永の拍子もなくてうしよのらぬむつとづら、秩父は宮商角徴羽の五つふ叶ふ琴三絃、かしこき例引たりちよつかい、ばち利生有糸さばき直成道の「とのはや詫ぬれば、親したふ子の、かた膝行、身を立兼る音をぞ泣、うきみをこし、岡崎の、かた邊、井場十藏一幸が老母をはこくむわらやの軒母の何をか思ひ寐の彼唐土の顔回も樂みは似ぬ臂枕世もつき合ぬきさん、は、引立る戸のすきまより風のみ通ふ計みて、まれもとふ人もなし、憂ふしを、身もそへ持し釣竿の暇有げも見ゆれ共母の一人居氣遣と心の急ぐ井場十藏腰の襠の、おもたきを、足元からく立歸り、是は母人、いつもないひるねなされしな、定て妹が身の上を、あんな寝の、夢程も、お心休めは珍重く、此間も釣

た此鯉を調味して、ほぜん上んと取出す、片足たらぬ眞那板も、とて漢人の鑄庖丁、棚からぐはつたり落たいたなんぞ、其ひゞきよ目覺て母の起上り、^四十藏戻つてか何として遅かりしぞ、あこやがあの身よ成しより講釋も打やめ、一寸内を出ぬ人の適のるすなれど、心細ふ待かねるけふは先いづくへぞ、さればふと存付釣よ参りしらんなされ、此鯉を二こん迄終よ覺ぬ獵のきしやう、是も母人は息災延命の印と思へば、大分嬉しう存ますと聞て不興し、何釣よいて其こお取たか、それが母が息災延命の印か、是ハ又十藏共覺ぬ常さへ母が嫌の殺生、とよあこやが今のくるしみ、人並よ世を経る我ならばその祈かしこの祈禱生有物の命を助けじひぜんごんの果でなり共助たい、此時節面白そふよ釣所じやおじやるまい、かわいや其鯉がわごせよ釣れ眞那板よ乗くるしみも、あこやが六はらで賣らるしくるしみも、人と魚との名の違どくるしむ所よ二つ

ない、鯉こいのお蔭かげで息災延命ありやいやでおまやる、年頃日頃の孝行かうこうもあ
いそもこそもつき果はてしと、身を捻背ねむきけて恨顔うらみ左様さようと思召おもさば御詞しかり御尤
千万まんぜん、全まことく慰なぐさの釣殺生つりせうしやうよいのす、あこやがとよ願着ごんぢやく有あ忘わすれなされしか、
今月今日こんげつこんにちに誕生たんじやう日、浪人の後もかたのとく貧きうしき中なかつ、尾首おかしらの有摺物あるしほ
也共調ともいめ、たふお盃頂戴てうだひ致いたさぬ年もなし、殊ことも今年ことしにはや七十二いは
ひばや納おさめ、來年のけふの不定ふぢやうの世の中相かはらず祝いはひ奉らんと、此間心
懸れ共遠慮で講釋かうしやく仕らず、さこ一疋調びきといのへん價あたひよつき果殺生はてとい存ぞんな
ら、小鯛よるでも釣つては肴さかあよと存たれば、はらんの如く三年物の鯉こい三こん、鯉
の鱗うろこ三三十六枚有とす、二こん合せて七十二枚の鱗うろこ、母のはは年も七十二、
都合つがうめでたふ是で母の誕生たんじやう日を祝しゆくせよと、八大龍王りやうわうの賜たまはると嬉しく持て
歸りし、十藏じゆざうも木石もくせきならず詞ことばより出さね共たつた一人の妹いもうとがくるしみ、
母の歎なげ悲かなしみが悲かなしかる、まいか思ひやつてたべ母人ははと歎なげかば母の歎

ぞと泣でこまへ語ける、あふ恥しや、十歳早ふ其鯉料理して、母が誕生祝ふてたべ、悔しや訶た説言は悲しい中でよくと笑ふて膳がいたゞきたい、雪の中の筍氷の魚、唐土人の孝行も劣いせぬぞやれ十歳とは云物のいちらしげは鱗の數ど我年と同一年、いかよしても殺されまいは身が出世も此鯉の龍門の瀧を上るとくわやかつて命助てやりや、此盆をこふすゆれば幸まきゑの鶴の料理、心で祝ふ千代や千代親子めでたふ盃せん、酒がなと有ければ、説言とい勿躰ない、お心とくれバ此上の大けいあし、酒も則用意せりとふこの内より取出す、徳利も餘る悦び貌とよもかくよもほ心よ、背かぬをけふのは馳走、てい主方ま一人有と下屋まかけ入、はおりかた手よあたま計の食籠も、とさんまとのかけ盃わびしき中、假初も禮儀亂さぬ親と子の昔の育おくゆかし、是はなつかしや、景清のは身よもらかせしはおりならずや、され

ハ其時ヤせしハ、是を打懸景清が孝行も一所と頼置たれば、此座又置ハ
是ハ景清、今日のとぶきてい主二人と思召、先盃お取上いざお酌仕らん、
日頃は聞召れねど今日ハ半盞はんさん、忝いゝ、酒ハ愁うれひのほふきとヤせば暫
もあきばらし、其ハ盃ザン景清載いたて、直又返進へんしんヤしめせといふもつぐも
かた計さらば盃お取次肴なく共盤殿の盃、まわ錢ぜにの廻り程是ハゝゝ
つぐまいと、存ながら又はんしたり静しづかハあがらいで、誠又下戸げこの
むいきのみ吞のすぐ又私ハ頂戴てうたい、手酌じやくハ恥はぢの物是はらんぜと、さうりどくんで
ついとほし憚たふかりながら又返進ハ酒ハきこん毎年うたふおさかな、今年
かいんも心がしり世上の聞へもいへば随分と聲ひくも、母ハ千代ませ
ゝどくりとを祝いはひうたの、面白の時代や、嘉例かれいの肴さかめでたいゝ、取じ
や又母も一つ受吞のむとハならず是つけざし、ハ是ハ有がたいといたなき
ゝ、すつとほし然らハハ意又任せ盃ハ是迄、餘りきげんよいハ付近

比不孝な願あれ共、上て見ませふが、は聞分下されど飛走さつて手を
つかへ、あこやがこんどのくるしみの景清もゑんを結んだる故、といふ
て重くの大恩有景清が行衛知ても云まじ、増て存せねば責殺さるゝの
あんの内、私つくゝ存るゝあこやが腹のな是ゝと承るゝ、いかなく、
殺させてゝ母も我も景清は何と面を合すべき、然れども力わざよい、い
こかしも助もならぬ、所を何の苦もなく助る極上ゝの分別を極し、某
あこやが責られし彼あこやの松と京童の異名を付し、六はらの松の下
よて腹十文字よかつさばき、上總の七兵衛景清運命拙く、とても頼朝を
討と叶ひぬ故、腹切て相果る者也如件など、似つこらしく書置を残し
相果る、景清切腹する上、あこやも用なしと、命助るのみならず京都
鎌倉心を敷せ、ゆだんを窺ひ、景清殿安と、本懐を達せられん、掌を
見るが如し、一日切腹を急げ、一日妹がくげんを助る、とつくや上んと

存せしか共親子一世の此世の別れ、賣て快ふは誕生日を祝ひ納て後の
 とし、今日迄色も出さず思ひ初し其日より、一日を千日万日どのつゝ
 そつゝ待かねし、今日只今より誰か我よかいつていたなりはごくみ奉
 らん、尤妹の有ながら女のと、かたゝの手の落たやうと思召、歎が積つ
 ては身のくづをれそれがこふ迄て又妹が悲しいめを見ようかとゐん
 ぞつゝくれれば身も世もあられず、悲しけれ共始からない十藏玄やと思
 召明らめ不孝の罪をゆるされ、命のお暇下されば有がたからんと跡云
 さし、胸迄ぐつぐとつゝ懸る、涙しらせじなき貌見せじとさしうつふき
 疊よ、くい付願ける、母にしほるゝ氣色もなく、其詞遅かつた十藏けさ
 ん云ふかばんよん云かど、毎日ゝ待兼て思ふよん、心が付ぬかいやぬ
 かる者でもないど心の内でとつおいつ親子の中も侍よ玄ねと教るん
 耻も有遠慮も有、いつ云ふてくれるとぞやど、今迄わとせが立身出世を

待たやうと待兼ねし、母の誰がなふても飢もせずこゝろもせぬ増て妹が
ゐるからの跡あんぢるとみぢんもない、未練な心を残さず共いさぎよ
ふ腹切て、景清の恩もほうじ妹が命も助てくれといふとて妹が助たさ
ゝ死ねと云でゝ更ゝなし、簪折かゝみの眞實の我子兄弟、月日と力ゝく
らせしもの、夜計がよからふか、晝計でよからふか、夜晝があれバこそ立
世の中ゝ老の身の、かゝいさゝ隔ゝなければ共妹が腹ゝの男孫か女孫か、
は身が爲ゝの甥か姪か胤ゝ景清の預り物、それ殺すまい計ゝ死ねと云
合點か、幸と其盃又歸る旅ならバ母が吞でさすべきが再び戻らぬ死手
の盃、一つ吞で母ゝさせ進せんと立上り、胸と一所ゝ踊鯉を鉢ゝ入、十藏
が前ゝすへ、今しぬる身ゝ入ぬ咄あれ共物の聞て置ふと、わとぜが祖父
様わらはを縁ゝ付給ふ時、切腹人の今ゝゝ鯉の濱焼をすへ、飯櫃のふ
たでさうじすると故實也、聞て置と物語、人の上でも有とか我子の役ゝ

今立た此鯉のけふ釣^つまかりしも思へば天のあたへぞや祝^いふですわ
つて早ふいてきれいゝ死ねざらばく^ゝと目をとちて重^{かさね}て詞もなかり
けり、^調有がたや望叶ひし我大けい、死後の見ぐるしからぬやうとても
のとよさつぱりと、玄ぞりゝ月額^{さかき}仕らん剃刀^{かみそり}砥石^{とどいし}いづくよと尋れ
^調それよからふ今生^{こんじやう}みらいのはれの月額^{さかき}母が剃^そておませふと髪^{かみ}もみ
やれ、こゝ冥^{みやう}加^かなや生々^{しやうしやう}世々のほかたみほじたい仕らぬと鹽^{たらい}取間^まも
有やなし走^{はしり}の水まさらしかくれ、母の末世の手本とあれ武士のかゝみ
と鏡立^{かがりだて}、砥る剃刀^{かみそり}携出^{たづさへ}磨^{とぎ}も磁^{みか}も弓取を、子と持親^{もぢおや}の皆これと思ひながし
の合水^{あはせ}、けふ別れてゐあふこの、かねよりかたき合砥^{あはせ}や、力涙を押包^{つづ}袖^{そで}よ
袂^{たもと}よ手合^{てあはせ}し、サア十藏と有ければ、思ひ乱^{みだ}るゝ黒髪^{くろかみ}をもんで鏡^{かがみ}と打向^{うちむか}ふ、母
の後^{うしろ}ゝ立廻^{たしほ}り、^調なんと十藏親が子供のかうぞりのほんの月額^{さかき}、逆剃^{さかそり}よせ
ふかいの、^調いや若い^{わか}が先立^{まへだて}も老たるが、残るも、此方こそ逆^{さか}さまと存れ

共、皆前生から定つた直剃すくもなされ下されかし、心へしと老の手のふ
るふを見せじ、ふるのじと二剃そ三剃そ顔と面、互うも移る鏡の内いやなふ十
藏もいくつと成ても面おもかけの残るの昔の幼顔せうがはあてよならぬは額ひたいの黒子くろこ、
見通しの法印はういんが六十八迄請合し其命、まだ半分も立たずこんなことが
有ふとい、神佛のなされた八卦はつぱも間うまも虚うそが有かいの、おおかしいとで
い有わいの、いや私の八卦はつぱの合ぬをいかふ嬉うれしう存ます、先年國元くにもとでは
大病おほいづらひお煩わづらひなされた時、百人の醫者いしやは百人陰陽師おんやうし山伏さんぶつ名僧なそう智識ちしきの占うらなひも、
は本服ほんふくと申者まをものの一人もなかりしが、は快氣くわいきも間もなく七十二迄は息災そくさい、
此やうなめでたいといござりませぬ、いやればそれもそふ、其時參つ
たら今日廣ひろい國へ主ぬしづいていきやる、嬉うれえいさかやきいそるまい物、長
生いさしてこんなめよあふ、めでたいぞや、何か云間も時うつるさかやき
そつてしまふと、かこりやいつの間まもみ直なおしやつた、いやもみ直なおし

ハ致しませぬでもひつたりとぬれて有、それはお前のあの處わいのお
れがなんの、みぢんもなきやせぬくといふ聲くもる鏡の内、互は顔を
見合て笑ひを作るきり立る、老の手わざのかよひきも剃刀ばやゑそり
なせり、是からは聾の景清殿大國の所知入、まさかの用と嗜しはれ小袖
召せんと取出す、心のやみのまつくろく、縞隠行だてばかり、行長あひ
てのつしりと大小さすが浪人の昔かゝやく金作十藏、忽景清と見かん
す計見へよける、物數いひ老人のもしや心も乱れんと門より出、是迄養
育の恩海よりくらぶれば蒼海淺く、山は譬れば須彌山ひくしとさせ共、
命は又義よりつてかろしといへり、妹がとひすゑ及ずや上度敷く、來
世のこと、日の内清水よりくらし切腹にくれ六つの鐘を限つて逆さま
なとながら、あゑかう頼奉ると云捨つしと走行、母いついて走出、え
ばし待物いはふ、おうい、呼と答す、餘も、涙と年のうときめよ其行か

たは見へざりけり、あつと大地も伏轉鬼もせよ蛇もせよ死も行子を
をいてまねと、歎かぬ親の有べきか、女なれ共侍の親も生れた身のいん
ぐ、泣たいを得泣ずりくついふたり笑ふたを、誠の心と思ひしか、狂氣
半分はんぶん死んでおたのやい、出立た姿いつわすれふ、千騎二千騎
の大將とあをいでも、不足ない子をかいや一生ひんくも埋らせ、鎧甲
させあんだが悲しい、いつそ不孝も有たらば是程思ふまい、孝行もまて
くれたが今で、結句恨めしいと、涙の限聲限泣ていくとき立て、轉や
る方涙も伏沈むかゝる所へ、榛澤六郎成清、あこやをかこゝいたなり來
り、老母、あこやが身の上せんぞ落着致すもよつて送りかへさる、併
胎内も子をやどせば平産迄、他國叶はず、男子出生なら、決斷所へ訴
ふべし、女子も置いて、構あしとの、誕意成どとあこやを引、渡さるれば、
のふなつかしや母様とすがり付たる嬉しなき、母の仰天氣をうろたへ

ふまめで戻つたか、嬉しやの悲しやのこんなと知たらやるまい物、六は
らんどつちぞまだ十藏が日はくれまいか、よふ戻つてくれたな入相が
死だらなんとせふ、兄が鐘の鳴まいか、と何を云やら氣もそゝろよ、よそ
よはならぬくれ六つを胸よどんくくつく計、母様それの何おつま
やる、いかいおせは六郎様へお禮くど氣を付れば、ほんよくと手を
合伏拜より外ぞなき、久よての對面うろたゆる程嬉しい筈、あこや
を渡せば他も用なしと六郎の下部を、引ぐし立かへる、母様悦びの道理
ながら其様よ、なせうろくなされまず、うろくせいで兄の腹切よ
いたのやい、そりやまあとこへなんとしと驚け、そあたの命助ふ
方便、景清も成かりつて六はらの松の下、日の中、清水でくらし、入相の
鐘といつ時は腹切筈、かふいふてはゐられぬとかけ出して、いとうと
こけ、歎よよはる足よ、車あこや悲しさやるかたき、戻ると其儘なせ

云て下さんせぬ、女の足でもつい一走わしがいて暮れぬ内、兄様つれま
して立かへると、ばやかけ出すおのが名のあこやの、松へどいそぎ行、こ
こも過つる元暦元年源平の戦ひ壇浦^{だんのうち}まで、上總七兵衛景清も出會不覺^{あひ}
をとりし源氏の侍、みかのやの四郎國時其身の恥辱^{ちじよく}を願て、陣所^{ちんしょ}も歸ら
ず直も逐電^{ちくでん}してけるが、景清世ながらへ都もさまよふと聞しより、憤^{ふん}
をどげ弓箭^{ゆみや}の恥をすしがんど、ありかをさがす京巡りけふしもこゝ
を尋來り、あふぎのはしと書付たる心覺ひらき見て、岡崎^{おかざき}の村はづれ
北を受たる一軒屋^{けん}、西も敷垣^{ふきぎ}入口も井の字の印有ぞくと打うなづき
内の様子を窺^{うかが}へ、主^{あるじ}の老女が年恰好^{としかつかう}はこそとつくと入、あがり口も踞^{しりうたけ}
老女^{らうにょ}、あこやが母は儕よな、聳^{さか}の景清八島の浦まで、箕尾谷^{かおのや}と軍物語聞及
ばん我こそ其箕尾谷四郎國時^{とし}、景清がありかをさがす、又鎌倉よりもせ
んぞきびしく、秩父岩永^{ちちよ}が承はり、あこやもありかを責問^{せめとば}るゝ所、白狀せ

し共せぬ共取々の風説ふうせつそれのともあれ儻が知ぬとよも有まじ眞直まっすぐもぬかせ、知ぬなどし偽いつはらばまの首捻ねぢていひせんと、おとしかしれべきよつとして、いや知ぬ共存た共、どかくの返答へんとうあきれ果顔はてを、詠る計也、さやつ知てとぼけるか、あらぎでい行まじと分別し面色めんしよくを和やまらげ、老女らうにょこしを合点せよ、箕尾谷むこい心持たれば、むたいよつれ歸り人質にちも取り景清が心をしぶらせ聞出す仕やうも有、又、すつぱりと切殺し、景清が外姑しやうこの敵となつて出る仕様もあれど、咎とがあい、人を殺しひけうを働はたらく我ならず、手近ふいへバあてや殿とゑんがきれ、のけバ他人の景清身はくづれふどかくしとげふと思ふは五十年さきのかたぎ當世の川流かわながれさらりく、合点かお袋ふくろと氣きを赦ゆるさせてたらしける、合せ物はがれの離物はなれいのしやれば、そこも有、當代の昔どちがひ、弟子でしの器量きりやうの有なしも構かまはず、弓矢打物の大事さへ金次第かねじだいで傳授でんじゆするげな、氣調のさバけた世よやとざらぬか、

水心あれば魚心有、問様は心あれば教様も心が有るふお物の様と思はるゝぞやとござらぬかと、詞の謎をどく香込路銀のさいふ取出す、じつとまりめは懸ながら猶見ぬ顔の空とぼけ、いやなふお袋知ぬ所へ初て参り、ふみあらししたばこをあらし忝いと、一包膝元はそつと置、苦もなく取て指先はひねつて見、誠は是は茶の金そふな戴程の重みでもなし、コレ人のありかを訴人すれば、囑托の大法さへ判金七枚は極つた世の中茶の銭計なせ極らぬでござるぞいのおつと茶の金香こんだ、判金七枚と左いふの包取出し、前はならぶる折こそあれ、あこや十載は尋逢互の悦びいそくと、立歸る庵の内見なれぬ武士は見なれぬ小判、こいいかどうかつは兄弟得這入らず内の様子を窺ける箕尾谷悦び望のごとく此金を渡す上、景清が在家を知せ我は討せ、此みおのやが願かあへてくれ、神佛に貴い金を、大ぶん取からの教ませいでなんとせふ、上總

の七兵衛景清がありがたは、爰より有と十藏大音聲と呼つてかけ入珍ら
 し、箕尾谷見忘^{わすれ}えか壇^{だん}の浦^{うら}みて見参^{げんさん}せし景清、汝弓^{きう}箭^{せん}の恥^ちを思ひ付狙
 どいどく聞たり、今廻^{めぐ}りあふいうどんげ、鬱憤^{うつぱん}をはらせ相手も成て得さ
 すべし、サア拔^ぬせうぶと詰^{つめ}よつたり、敵も詞^{こと}をかけられて箕尾谷なじかは
 臆^{おそ}すべき、拔放^{ぬきほう}さんといしつれ共壇^{だん}のうらの戦^{たたかひ}は、互^{たがひ}の姿^{すがた}甲冑^{かうきう}の昔^{むかし}もか
 はる形像^{かたがた}、それかわらぬかいぶかしとためらふけしき十藏いとつて、
 臆^{おそ}れしか箕尾谷、又臆病^{おくびやう}がおこりしな、性根^{しやうね}を付てくれんずとひらりと
 拔^ぬて打^{うち}かくる、母もあこやも心くれわつと、叫泣^{さけび}計^{けい}、兩方互^{りうはうご}も秘術^{ひじゆつ}をつく
 し打ぞと見へし十藏が、刀の金やさるたりけん、つば本々ほつきと折て
 飛ちつたり、十藏つかをからりと捨景清が運命^{うんめい}是迄也、サア首打^{きううち}と指^{さし}のぶ
 れバ、神妙^{しんべう}也景清とふり上る刀の下眼^{したまなこ}をどちたるつら魂^{たま}つくくとど
 打守^{うちまも}り、主君^{しゅきみ}の仇^{あだ}を報^{はら}せんと、鎌倉殿^{かまくらでん}を狙^{ねら}ふ景清、刀が折たらば指^{さし}ぞへも

有命のかけがへも有様と首さしのべし、いやくく、みをのやが
一こしは、正眞の景清が首を打で、叶ぬ刀、紛者まぎれは得よとすまいと
さやと納、儕景清もふ取置と一分別有、其有さま、一器量有、おのこ也、母の
手を打、よい分別や眼力や、其男男の十藏と云我むすこ、誠の七兵衛、景清
がかくれ住所は、清水の後堂うしろだちより本堂へ是かふまゐる、左りの方と折た
る刀おつ取て、ぐつとつゝ込乳の下かけて引廻す、悲しや是れいと驚き
さはぎそも何故のほ、然がいと、兄弟すがり取付ばこゝゝいかよとみ
おのやもあされ、果たる計也、母のくるしき息ながらやれ兄弟よ、其金を
路銀ろぎんとして、景清のありかを尋、母が命の有内もちやつといけく、る
嬉しやまんまど仕おほせた、かふ云たら、箕尾谷様さぞやさぞ憎からふ、
身を切刻ききりくだかれても、元より知ぬ景清のありか教ふと偽し、兄弟を
尋よやる路銀と金とらふ大語大ぬす人、あのバゝめづたゝゝもどお

ぼしめそふが、かゝゆふてくどふもならぬ、子供の爲むこの爲語かたごも成
 て死しる母が心、子を持て後思おもひやり其時恨うらみをはれてたべ、兄弟あによ、千日
 千夜云てもなごりは盡つねど皆あだど、かまへてく心こころを合景清あはせを見立
 てくれ、是を云てしまへバ心こころよかすると浮世うきよもないと、詞ことばの涼すずしく心こころ
 よゐる息いきも切、此世の別わかれ消きはつる、あこやゝ更ゆめも夢現ゆめげん、辨知わんちす取乱とりごしわ
 つと計はかりふ伏ふ沈しづむ、十藏じうざうのみおのやゝ泣面なみつゝひはえもみぢ胸むねは時雨しぐれよ
 雨あめやさめいゝ木ならねバみおのやゝ、敵かたきの敵金かたねの金死しす共是式これしきよ丁簡ちやうけん
 も有べきを不便びんの母がさいごやど、よそめ遣づかひを頼たのもしき、やゝ有て十藏
 金おつ取物とりものをも云すみおのやが前まへに置おく、返辨へんべんの心尤也、此上こゝのやると
 云共ともよも受うまゑど立て死しがいの前まへに置おく、七日ななの吊金とぶし七しち、四十九雨
 の香典かうでん死人しにんゝ手向たむける上うへからゝ禮れいを受うふやうもなし、思おもふもきせぬ來世らいせ
 がね受悦うゑんで成佛ぶつあれ、扱某しやくは参まゐりやど立出たちるけみおのや母おゝ手向たむけの

情なさけのあれ共景清を狙ねらは邊へんなれば、此十藏いつ迄さまたけも妨入るがつてんか、いふよや及ぶ老母が愛心あいしんよめんじ狙ねらまじ討まじと云たけれ共我も根井の太夫と云親有、我ゆへ江州へ蟄居ちつきよの身、景清を討うちてくいいけいの恥はじをすしがすんば、孝行も武道も立がたし汝等兄弟景清は廻めぐりあはゞ、かく付狙ねらと云聞せ必用心怠おそるな、十藏がつらをとつくど見置人たがへして、悔くやむなよ、何さく千休佛程あるとても、一念いちねんの眼力誠がんりきまの景清討て見せふぞ、見ごと討か儕見おのれごと妨かど、思はず兩方反打そりてつめ懸る、あてや立出互たてでよなだめなだめられ別出るも止とどまるも共よかいなきはしきいの有どの見へてなきがらをふるいついらよ法の道、心は綱代あじろのそう禮ごしと兄が歎なげけバ妹の、まそつとまづしい野送りでもどうろうあり共有物をど、くらむ心のともし火をのりの光りよかき立て、あくくよなひもろ聲こゑよ爾時無盡意にじむじんい并即從座起偏袒へんたん右肩合掌がっしやう向佛而作是言はせ世尊さんぜく

いんぜ音弁大玄大ひを引導^{みちびき}ふ、此世を離行旅^{はなれたび}と人を尋ふ行旅と道^{みち}の、二筋かかれ共涙^{なみだ}ひひとつ一筋の誠の道、こそしるべなれ

○第四 道行旅寝の添乳歌^{そへちうた}

はしきいの有とは見へて、あはぬとは代^かゝのながめの、たねあれど、わが身ひとつつれなきと、思ふ心の松の名や世もあこやがつま思ひ、つとめの中のとより、もふけしたねのちござくら、うゐの子持のかいえよなき、姿^{すがた}を人のそしりぐさ、さがなき口もおのづから七十五日はや立て、けふ忌明^{いみちき}のとぶきや、うぶすな詣^{もうで}よかこつけて、うよその「人を、尋行あてども長の、旅なれど、ついすげがさよざうりがけ、あんじるよりもやすやすと、思へばからき三條のはしも後^{うしろ}遠^{とほ}ざかり京^{みやこ}のなごりと見かへれば、跡^{あと}は退付^{おひ}十藏が、日がさかた手よふりつゝみ、まだ持遊び、えらぬ子よあまやかしたるおち様とたがひふ、わらひあつた山、こへてぞこゝよ

退分や大津繪めせと旅人の心をえべしつなぐよぞさして、おしまぬせ
ぜの町せたの長はし、かゝる身のおもき思ひを、いのれとや、そなたよ立
る石山寺なむくいんせおん菩薩、大じ大ひの恵みて、やひばよしづむ母
上の、みらいのやみもはれ渡り、真如の月のかのさしよむかひせ、賜へど
伏おがむ、袖も露けき、春の野よおのがありかをしれよとて、つまこふ聲
いけんくほろく、子を思ふ身いねんくころく、なくなしらいそ我ふ
どころよ、ちしたる春の、日影を受けて、そだて上なんうべがもちくさつを
早く出はあれて、右と左へ二筋の道の、わかれしわがつまも、あふみと計
えらま弓、いづくをさして行なんと、あんじ迷ふも道理ある、十藏ふつと
思ひ付まだいんけなきみどり子の、心い正直正路みて、神や佛の恵も
かなふにぐしの氣結び、辻占といんど立よりて、心よ右を尋れば、かはを
えぜんとそふけたる、かぶりたこのよしなしと、又とふて見る左の道よ

つとゑがほのかゝみの山、うつる心よまかせんと、行道もせし、初花はつはなのふ
 ぶきも深くもり山の梢こすえ残らず色めきていとまほらしき、里のわか嫁よめ、小
 娘達むすめたちが春の物としてはやり歌、からもやまとも、ひさも都もぬれのさたさた
 ゑしやさし、ちんないろく、すいやく、まゆくのかゝみの、おのこ和わ
 女郎ぢやうらうがよすだんかうエサゑちがし、こへてたかみやの、町よりぬの二
 柱はしらおたがじやくしの森もりまげみ、はるかそなたとぬかつきて夫そとの命長か
 れど、守まもぶくろをかけまくも、かたじけなしとゆふつげの、とりもとのま
 ゆく、やぐらべし渡りく、て見あぐれば雲くもをぬひ行すりばりのとうげ、
 はるかゝ夕がすみ旅たびの心のいそがしさひとり打たりまふたりのかは
 を過行長あし手、たつちぢだうをめあてゐてたどり、行身ぎんみの「たよりなき
 住よしの橋の反そりた」大工からかや木からか、木をけづりかななくくれ
 ばかななからかもしらぬゑ、まらぬなかも、すめば又、我身一つの都ぞ

と心のいそぎのべし置、悪七兵衛景清が人ふしんを打れじと、ふしん
通ひふ身をやつす、在所大工の中間ふ入、脊高く、と異名をよべれ、なが
れ渡りの手間しとけふもほうばい打つれだち、ふえん場を早申の刻
くるふおそき春の日の、ぶらく、かしこよ立歸る、たつた今迄く
んくした空で有たが、聞へた狐の嫁入のそべへ雨、はらしていかふ
と辻堂ふ立よる内の高咄し、中ふかしらと思しきがはり脇かまへ分別
がほ、ちらが出入のしとだんな根井の太夫大彌太様、お名が大彌太と
いふふよつてめつたやたの大やしき、此度のふしん鎌倉の頼朝様
がおこしかけふとおつえやる故、物入かまはぬ結構すくめ正眞の大名
ぶしん、皆もすいぶんせい出しやれ、手間ちんはもうけ次第、脊高そふ
じやないか、いかふもこなたのいんえやる通えや扱あゝの根井の太夫殿
はどう見てもあほうぞや、それをあせといふふ、鎌倉の頼朝様がおこし

かけふとおつしやるなら、ついあがり口を一けん程ふしんしてすむと、
それもやかまししい床机一脚あてがふたら、ゆつくりこしはかけらる
るよ、いかまかねが澤山なとてあだづいゑな大ぶしん、但頼朝様のござ
るといふの世間への云ふらゑで、あの内よござる娘は又聳殿取ては祝
言、其はれのふしんぞやないかとよそあながらうらどへば、文盲な、お
腰かけらるゝと云て常体の人間どいちがふて、頭さへ大きい頼朝様、こ
しの廻りの思ひやらるゝでつかちない物で有ふ、此様なとでふしんが
あけりやちとどが中間も立ぬてや、ゑたがまあよろこびやれならの大
佛、こん立成、是から段々興福寺のぐいんでゑのと、大王の秋が入てく
る近年もあいつかみ取、是といふも番匠の始り太子様のお影、此度七堂
がらん修覆、又付大工中間一統、又手間を御きゑんすが、めいゝの冥加
の爲、一年も六日づゝあたま役、又廻つてくる、おらがばん、又當つたら戻

りみやげのめいぶつのほしかぶらかふてこふと笑ひもどつとはれ渡
る、雨のあしもと、よはくとたびあてやが兄弟づれぬれみかはさみ
すげ笠の辻堂よさしかれば、互に見合す顔と顔、景清ちやくとこは
あ旅のお衆そふなが雨あふてさぞ御なんぎ、まあこゝでゆるりつと
日のくるゝ迄やすんでござれ、お連もせかずとと目で知すれば吞
込十藏、お詞あまへてやかねたとなれ共、火打があらばおかま下され
一ぶく吸付やたし、いやゝゝ火打の持ませぬがよい事を存じ付た幸有
合檜の切、さりもみよして進せふと道具箱あぜかへせば、ほふばい共口
口よ、いやせだかめがたばこの火で旅の女中こまづける、あの抱た子が
目も見へぬか、れつきとした男をはなの先よ置ながら、ふづくりかける
大たん猫のむきへお見廻す鼠じや迄、それゝ猫で思ひだした日明て
ぬる蛸へ、ほでぼしを突こんで迷惑するを見るやうな、構はずと置てこ

いと笑ふて、皆立かへる、跡は三人詞も口へ、是はふじでけんごでよふまめでゐて下さんしたと、あこやの夫あすがり付ふべし、涙よくれるが、なふ此様は廻り合、はふじな顔いつか見よふとたつた今迄あんせしよ、是と云も年頃日頃はん音様をねんじた印、一ついにかい兄様のおせわのかひでやゝ迄うみ、親子兄弟一所へよるよ付ても母様のと、詞を残すくもり聲、景清外のみよも入ず、年よられたる母人同道なきは第一のきがしり、あててゝゝ、あてさいは十藏様、されば、我母女よのまれなる最期、いやもふ是は順の道、あてさいのあこやよゆるゝとほ聞われど、愁をよそよくろむれば、景清はあ、ひざ膝を打て、あて残念某日陰の身ならすべ、都は有内對面、あて智姑のは盃責ていたいくものならば、是程よは思ふまじと男、涙のくりとよ、あこやも今さら十藏もつきぬ歎を押かくし、あて扱まわ何からやそふやら、なんぞのうちの悦びとあこやが平産、あた

り近所の介抱かいほうゝて漸あやうくとすくだしせ、うぶす奇詣きぎと僞京いつはりみやぎとのすいとぬけた
れど、貴方きほうのゆくゑあふみど計どこをえやうどと思ひしよ、ふしぎよも
廻り合天道てんどうの恵めぐみ、此上の珍重ちんちょうのあいらまう生れた此子、手渡しやが我
等がみやげ、指似しゆにを置てきたのそこものさいくのわざ、あのやうよ
よこくと、笑ふ程よそだて上たの伯父おぢがえまん、是計は恩よきてもら
いよやならぬと笑ふて見すれば、其元への禮景清が口でいすさぬか
くの通ど、頭かぶをさげ手をわかへ、扱あでかしたのあこやが心底しんてい六はらへ引
出され拷問がうもんよあふぞとい、人の噂うわさよ聞つれ共心よ悔計くわいゝて、憂うれめをすく
ふえがしもなく無念むねんの月日をくらせしが、今日只今めぐりあふの操みさばの
徳とくあつばれていせつ過分わふんく、なふ其お詞たつた一つ聞ふ計のえんぼ
ふ、つれそふ女房よ過分わふんとい勿躰もつたいあや忝かたじけなや、此子も心よ悦ぶやちち
りまそふよ吞のんでゐる、顔見てやつて下さんせと云どいもせの誠なる、景

清重て是なふきかれよ、某^調が日比の願望^{ぐわんそう}追付^{おひつけ}、成就^{じゆじゆ}の幸有^{さいにひ}、此長濱^{ながはま}のかた
 邊^{はしり}、根井太夫大彌太がゐん居屋敷へ、源のよりども上洛^{じやうらく}の次手^{ついで}も立よら
 んとの風説^{ふうせつ}聞^きとひとしく飛立計^{ひだちけい}、何とぞ根井がふしんも入込^{いりこみ}、この様子
 を伺^{うかが}はんと思ひ付より、俄大工^{にいはか}、すうきを以此程より毎日ふしんもやど
 わるし、身の幸と悦ぶ矢先^や、かたゝゝ廻りあふもふしぎの吉さう、思
 ひこんだる念^{ねん}を以根井がやかたのあん内覺^{おうち}やすく、狙^{ねらひ}頼朝が首取^{くび}て
 平家も手向^{たむけ}ん、七兵衛が積りぶしん、たゞみこんだる胸の一圖^{いづ}氣遣有な
 と語るもどき、いさぎよし頼もしし、それと付て十藏が、一つの計略^{けいりやく}思ひ
 付たり、是^調より某東國^{それがし}へ赴^{おもむ}き、頼朝が上洛^{じやうらく}の道中へ出つくし、悪七兵衛
 景清となつて狼藉^{ろうせき}も及びあへ、供先しゆこの大小名、我討とらん、必^{ひつ}
 定^{ぢやう}景清の亡びしと頼朝も心をゆるし、根井が館^{やかた}も入來らん所を狙^{ねらふ}誠の
 景清、本望をとげ給ひ、つながる縁^{えん}の某迄、共も高名の數も入武士の大

けいはい是より過じ、あこやをば身より渡す上い、どかくの噂隙づいへ是より直
より罷立、妹さらば景清おさらば、天晴の心ざし身をすてゝの親切、此上
はどいむる共とまらぬ氣質の十藏殿、旅立の餞せんと道具箱の底より
も、かくし置たる一こし取出し、おなか大工の七兵衛が嗜道具のだん平
物、鎌倉表のふしんのはれさいてござれと指出せば、忝しと押藏、こゑも
ぼつ込讓の道具、さいくは流し侍の名を、万天より上ぶしんいさむ、心の内
ぶしん退付手がらを立揃、家わたりがゆのまめの數くひ當、かみ當、高名
せんと心も似れば形も似る、二人が姿ゑんのつる、瓜を二つの景清十藏
立別てぞ「行水の、さゝ波の國共讀し近津うみ、所の名さへ長濱とて代を
祝ひし家造、あるじの心廣庭よ、うつし植たるいとさくら今をさかりと
はびこりし、ねんぬの太夫大彌太がいんきよといへといふしへの、かた
氣に残る大みやうふしん、かすく多き作事の内かこいいあるじのも

のすきとて、ものゝねんしやのねんゐの太夫こしもとはしたゝ手傳てつたの
 せ、手づからむすぶかべ下地した、是でよしす、こゝへ一本ゐをくゝと此竹
 節ふしの付やうが至極ごくくゝ、こりやできた面白いと、きげん、よこゝゝわらひ
 な、しやんと結むすんでふつつり鎌かま、既すでに指ゆびをやらふどしたと指置さしおきバ口ゝ
 ん、遊あそべし付ぬ下したゝの手業てわざ、お慰なぐさどの云いひ乍さらおけがゝ有てゐ、お姫様ひめのお
 きも玄くろのふまふ是これでお仕廻遊しわいせ、おわいらがどの道理を知ぬよよつ
 てさ、此度のふえんゐな、忝かたじけなくくも鎌倉殿かまくらどのは上洛じやうらくのお次手ついで、此ぢいこゝろが隠居おんきよへ
 おこしかけらる有がたさ、かべ下地したでも自身じしんよするが、賣うてものもてむ
 しもちつと玄くろや手つだへど、又云付またいひる主命しゅめいゐ、いや共いよすたづさへて、
 えんき玄くろの竹斑たけまだら竹まどふかづらの永き日も、はや九つかふえんバの拍ひ
 子木ぎか、ちゝゝ晝休ひるやすみみ槌つちも、匠ちやんの斧のもえづまれバあ、ふしん小屋の晝食ひるじきじぶ
 んな、ばん迄までもかゝろふと思ふた此窓まど、半日はんじつゐはかいきく、扱あ此かべ

いどのさくねんめ云付ふぞ、すきやの上ぬりはれの物と獨つぶやく
目通へ、小ごしかめて慮外ながら、此かべをぬらんず者拙者ならで外
よなしと、こてひらめかしすきみ口かべ訴訟とぞ見へよける、有あふ女
中せうしがりは、是ゝかべぬり、殿様のおそへ近ふ、づきんもとらず、憚千萬
下りやゝ、ふさすが女中とて物の作法知ずじや否、若衆の紫ぼうし嫁
ひ領のわた帽子とも僧のあみ笠、さくいのづきんはぬぐがぶしつけ
ぬがぬが禮儀でござりますと、云ふ大彌太打うなづき、是のさるあらん
と、して其方の此間も見なれぬ者じやが、けふ初てのさくねんか、得手我
やうなひやうげ者の口バつかりでさいくゝあか下手、かこひの上ぬり
がてんがいかなぬ、是のお情ないほ一さん、正眞の口も口手も手とずの拙
者がと、先ほさいくの下地窓、見た所が地黄丸屋のかんぱん形水のへり
よよござりましょ、よしずのもやうにくづれごうし、此取合ふにあつさ

りどあさぎか桔梗ききやうか丁子ていじ茶ちやか、栗梅りゅうめい花色はないろ淡鼠たんねづみと、云ならぶればだまりお
ろかしましい、ふしんも未しまだみてぬ内くづれがうしといまゝくしいあ
いつあすからよせなどいへど、以ての外の不きげん、いわれぬすきや
のかべぬろより晝ひるめしのえらかべこぼつたが百くゐんまじと、さくわ
んいぶえゆびも内も入る、大彌太元も昔人ひたすら氣もやかりけん
めらうめら、此窓このまど打こぼつてまゝへ、早くくど阿あの聲こゑおくへもれて
や、娘の白梅するくど立出たてで、何事なんじをお氣もちがひとし様もお腹立させ
ます、是ど云も自がおそバもゐなんだ第一の誤、様子知ねどおきげん
直ちをされ、おこいのほせん氣をかへてわたしが部屋へやの庭のつゝじ、さいた
もあれバさかぬのも有が一種しゆのほ肴さか肴、さし事初てお遊びと物もの和やまらかよ
わぶるよぞ、子よほださるゝ親心おやこころ顔色かほいろ直して、そりや氣が替つて宜よろしか
らふ惣もつとじて必かならずまかゝるといひわひ直しが大事の物いやそれよ付て思

ひ出した、おまた入来る大工の中、人又すぐれて背の高い男め、つくも
見るよさいくの手バやさ、万事物なれたやつと見たをいつよべ、此窓の
祝儀祝ひ直させ、心よふ酒呑ふ其大工よんでこよ、はつとこたへる返事
の内お召なさるゝせだかめい、私でござりますと出合頭の拍子よふ鉢
巻取てつくまへば、あれ見たか白梅先づ退取てきてんきゝこりや背高
近ふよれ、其方が育がら都の生れとめきゝしたが、此あふみへいなぜよ
きた、是れ有がたいお尋、もと私ひだの國の出生、幼少のぶんより五
畿内を経めぐりて、きよねんより此おくよへ引こして参りしが、此度の
はふえん、頼朝様のお成とやらお出とやら、其は造作よやとわるゝは
大工冥加よ叶ふた有がたいことも存て、みちんのゝを仕らす一ぷくの
むたべこを半ぶくよげんじて一むざんよせい出しますれば、其はほう
びよ作料の五人前づゝは拜領願上ると願ける、成程く、其方が云通、悉

くも鎌倉殿、光臨有べきと仰下さる有がたさ、過ぎし比鶴が岡の八幡宮、造營の時、忝くも頼朝公、氏神への馳走とて、手づから石をばこび砂を持たんかづらを築給ふ、其ためしを思つてな、身も手づからの下地窓を差別も知ぬさく、いんめがむだ口、いかゝしても心よかゝる祝ひ直してくれまいか、是れ、お安い用、鶴が岡のゑんまつれて、此窓の龜の形万年のよわいまで、内の子は吹よせがうしふうきをよせると云心、お庭の花いと櫻むすびを永ふ頭をうなだれ下ゝが、なびき随ふまつ盛、おめでたふ存ますと祝儀とのぶればできた、こりや嬉しい、女子共此大工、勝手へともない料理くわせ酒吞せい、身もひるね酒過そふ、白梅こよと打つれてほた、悦びおくゝ入、意の出た大事のお客殿様、さげんの、ひづみをあかす大工殿つゝくりぶゑんの名人ど、女中のおどけよぎ、敷だい所へぞ通けるうしと見し、昔を今

したい草、世を忍ぶ草、まげる身のうきが、中よもつまや子を心一つの寶
の玉、あてやが名のみかひもなくからさせたいをしはたらと子持姿よ
古の、端手をくろめるおかたぶり、ひる間の辨當夫の爲は、こぶ心ぞ誠な
る、普請小屋さしのぞきさいくばをまだ仕廻すかど、おくを見入て伺ふ
中、おだい所のは馳走、顔のひよりもよいきげん、いそくと出てくる
は、こちの人、おやないかいの、女房共か、ぼんかよふ來たな、あど手を取
て、是はくきついにねつ、ぐんん、おでも、呑したか、此様なとなら晝めし持
てくるよ、及ぬ、子の育様が、大よそな、いらいをきつとたしなめく、な
ふひよんなと云お人、どのやうな寶もかへまいと思ふて、育上るめう
どが、樂みそまつするといなければ、共、廣いせかいをせまふくらし大事
をかしへたぬしのお身、大工のかげういせひもなく、朝内を出し、まして
も、どふかこふかと、あんな、おられ晝の日、あしを待かねて、辨當急ぐも、顔見

たさきげんよふさいつてとふろ敷包取出せばいやくけふの晝め
 し入ぬ思ひがけもないとが殿様の意入、おだい所へお召なされ結
 搦あおふるさい諸白を引受く、近年の系よう、ちとどが内のたんぼ酒
 うりバのちりとちちがふた物といふ顔つれく、打守り、いとほや時
 世とて心も詞も玄あ下り、むかしといふ似ても似付ぬなりかたち、思ひ出
 せばわぢきなや、人々多い其中より一門の用ひもつよく酒ゑんらんぶ
 の座敷もかたをならべ膝を組さもうらやまれたりつ身の、ほんよき
 りんも老ぬれば驚馬もおどると云たとへ、人々手をさげきげんを取わ
 づかの酒をたふどがり、諸白のうりばのと昔は夢もいぬ詞覺さし
 やつた悲々さと思ひず、かこつうき涙こりや何をばかつくす、人とい
 せんを芳しがらすと、男の外聞つくらしいの僧上置てくれ、けれう誰も聞
 ねばこそ、むだ口やめて早ふいね道でおいとをつめられなど、おどけよ

まぎらもめづかいのいねよく、女房の娘を抱て立かへる、おくより
主のこへとして、さいせんの大工それにいるか、せだか〜と呼かけて
庭へ出れば、是の殿様は用いか〜と畏る最前女子共へ云付た、は殿へ
見こすくらの窓のめふさぎ、いか〜してもうつとしい、成程其義の意
の趣かだい所で承へる、すさべわづかのはしたしと明朝でも致しま
しよ、いや〜、年寄の氣がいらつけふ中よしまつてくれい、其義なら只
今と形は似合ぬ尻があるき、かしこは置たる道具箱えやんとかたげて脚
代の、十二のはしで大またげのぼる大工のさもなくて見上るさのあぶ
ながり心ぐれつく丸太の上、板の幾重のかけはしを遙、おくへど歩行、大
彌太はく〜打うなずき、上の小袖ぬぎ捨れの下は腹巻ぐんばの出立、
袂よりよぶこのふゑ取出しふき立れば、相圖は随ふ日よう大工上へ
かなぐり立出る、袂のゆゑ敷武士の、こしよとりない十手たづさへ大彌

太が前よりならんだりとつゝいて内より娘の白梅、取なわしやんと玉だ
 すき、長刀退取すうはりのこしももすそも引しめて、心を配る二かめ
 りと數も又なまめかし、大彌太勇顔いさむねバせめて、いさぎよしかたゝ、本
 國玄なのよしみを忘れず、愚老ぐらうがさしづと姿をやつし、力となつて給
 いる段、祝着しうちやくせりと禮儀を述、扱此間心を付ためし見る彼大工、最前さいぜんかれ
 が妻女として用有げと來りしが、昔をしたふ詞のはし、疑もなき惡七兵衛
 景清と立聞たききと知たる故、ふしんとと寄脚代よせしうだいへ上置たり、年頃日頃親子が
 願、夫の仇聲あだこゑの意趣いしゆはらさん時節じせふ到來たうらいせり、不便や聲のみおのやが未此いまだ
 世とあがらへゐて、かくと傳へ聞あらば嘸まじほいなくも口おしからめ、と
 い思へ共手と入敵かたきやみくと逃にがしなば、月夜と釜かまのぬかり武士と世上
 のそしりはづかしく、ばん手のかねて定置はやふんでめと下知がちするよ
 ぞ、心的一致しちの信濃しなの育そだちきそのかけはしそれならでのぼるはしの子村鳥

の羽音もかくや脚代のふみどもしどろよせかゝる、惡七兵衛景清の、
心も兼てもうけの敵土藏をこだてよつゝ立て、ア物ゝしやとおかしや、
景清をからめんと、大黒柱を蟻の髭ど、わざ笑ふすきまを見て、とつた
どかゝる一ばん手、はつしどけられころゝゝ、高擧するどき瓦やね
巴よならんで三方より、かけよればまつかせど、匠斧もちよんと首どん
でこけらを風の吹敷ごとく遙かゝ投て鎗飽のがさじ者とひよつと出
の、あたまはつしとさい槌めを白くろとみつめざり、此世の息をはな
しのみ、手並よかなづち鋸の目よ立相手もあらばこそ、一どよどつとむ
らがるを、當り任せよひつ抓ばらりゝと投ほふる、大工のいざとて
棟上のもちまきちらす「ごとく也、大彌太今いたまりかね、娘我も續惡
七兵衛景清が鬼神もてもあらばこそ、チウと様そふでござんす、人と人
とのせうぶづく命を捨てやすかりなん、親子うなづきはしの子よか

け上らんとする所^所まばし／＼根井殿に待あれと聲を懸、おどり出るの
いせんのさくいん、大彌太いらつてさくいんたいある妨^{さまたげ}やつ、おのらが
出る場所^{ばしょ}は非^{あら}ずしされやつといかるゝぞ、すなのらね、實^{げに}尤かく、某^{それかし}
こそ、鴛^{むすしうと}鳥の契^{ちぎ}りをなま置みおのや四郎國時^{くはにとき}と詞も引ぬゝはつたどね
め付^{めづ}、しら／＼敷^き紛^{まぎ}れ者^{もの}儕^せ誠^{まこと}のみをのやならべとくゝもなのつて、出、惡七
兵衛景清をからめんと思ふ氣のあくて、三里^{さんり}下つてみおのやといひ、聞
へた／＼、扱^との景清が一族^{いそ}な、我^{われ}ゝゝ心をゆるさせ此^こ場^ばを遁^{のが}さん計^{けい}畧^{りやく}娘
かまふな捨置と又かけ出すを抱留^{いだき}は尤^{なほ}のほ詞^{こと}、付^つ狙^{ねら}景清と名を聞なが
らためらひし、知^し召^めすや日本は惡七兵衛二人有、内一人は似せ者ゝ
てゐるの十藏と云おのて、様子をかたればと長し其^{その}まづぶをたゝさん
爲^な、最前^{さいぜん}よりさし扣^{ひか}との様子を伺^{うか}ふゝ、かうきの働^{はたら}手^て並^{なら}の程^{ほど}、正^{しょう}眞^まの惡七
兵衛は極つたり、然る上^{ひかへ}のやがぶらんを開^{ひらく}てゝぞと思ひ、罷出

たる某が誠の出立はらんあれど、かなぐり捨るたちつけの玄やうぶか
いよ引かへて、せうぶゑき有はだぞの小具足家職ゑあらぬこて脚
當兇づきんをおほひたる下は誠のほし甲鎧ひされてと諷められし、名
源平は隠なきみおのやどこぞ知れけれ、白梅嬉しき飛立計、扱ひお前が
みおのや様縦は身の耻辱に有共連そふ女房は何遠慮、とくゑありかも
お知せ有、まめでぬる氣遣ひすなどつい一筆の便して、落付せふと云氣
もなくわんざりなきづよさ聞へませぬとかきくどく、尤の恨ながら、惡
七兵衛景清は、廻りあひざる其内、面目もあきみおのやと忍びくらせ
しかひ有て、今日只今景清は、廻りあひしが結ぶの神運つきて討るゝ共
みらいの契たがへじと、云に悦ぶ父の大彌太頼もしく、其詞が取も直
さずこん禮の盃、我手に入れた景清をば邊は任すが聲引手、舅が寸志受取
給へ、ハッ忝きは賜、祝納るゑんのつあと、どりなれたぐり大音上、かつさの

七兵衛景清いづくも有去元暦の戦ひもげんざんえたる源氏の武士、
みかのやの四郎國時汝も廻りあひん爲かりもやつしのさくめんがこ
てさき、ゆうきのあらかべ打こぼち、三寸なわよくくり上んかくとく、
と呼ひつたり、景清こらへず進出珍じやみかのや、昔の弓矢引かへて汝
も我も職人わざ、くらの鉢巻引しめて首の骨こそつよく共、此七兵衛が
腕先も受取ぶしんの力わざ、手並の手間ちん覺あらん猶も耻辱の上ぬ
りせよと、互も付よる身のかまへ、眼を配り氣を配り、ふむ脚代のだんの
うら、八島の戦今こゝも見るやと計いとみ合えせうぶも、付ざりし
が互もひつくむ脚代の板ふみくだき廣庭へどうと落たるはづみの拍
子、景清上も重なりしをえいやとかへすみかのやが、一念力の一筋もか
らむるなわいゆうしのいち時の運命ぜひぞなき、誰かいかくと告たり
けんつまのあこやかひと、敷幼子せなもえつかと負上おびしめて腰

刀息をばかりよかけ付しが、夫のなめ目もくれて、胸の涙のやみな
がら、そも何者のしわざぞとあたりを見廻し、こなたのみかのや殿、京
からくだり先へ付て廻つて聞へぬ人、又ぬつペリの口上手よこちらの
夫をたばかりしか、千も万も入ぬ、あのなわどいて主返しや、いやかお
ふか返事次第おなごがさいても刀の刀、かくこの魂違ひないど反を打
てつめかくる、みちのやさわがすさすがに女血迷ふたな、都て逢し時
景清も廻りあひ、必本望とぐるどどつがひし詞忘しな、何とも定る
運と思ひ明らめはや歸れ、いや／＼いや／＼明らめまい、恩も情も義理
も法も、夫よへ換られぬとすらりとぬいて打かくる、どつこいさせぬと
白梅が、中へだつる長刀の鐙をけづる女どち、悪七兵衛立上り、たゝか
ふあこや、押隔り、後手ながら引すゆれば、なふ情なや景清殿、此期も及
んで妻子の命かばふてのまわざか、責て女の念ばらし針でついた程成

共、みかのやゝ手を負せ、死たいわいのとはがみをなし身をもだへたる
叫泣、さすがの景清もてあつかい、えばし、あぐみておたりしが、エッぜひも
なや面目なや、某息の通ふ中詞より出さじと、思ひ極しとあがらは成女
が旁を、敵よ仇よと付ねらひ、道よ背ん不便さゝ子細を語聞てたべ、何な
ふみかのや、はへんの弟、こりや我の兄、一腹一生の兄弟成にと云ふ人々
顔見合是いと、驚く計也、みかのや更々信用せず、我父母は離し入さい
はや東西も辨たれば、對面あらす共兄有と云と噂も聞べき筈、いか
様子細もあらんが、先父母の住所名字けいづいにかよく、父の名の
愛甲の太郎國久とて源氏武士の浪人、母の氏平家の侍上總の一統、住
所の相州みかが谷、其時我の十一さいは邊の二さい、母のゆかりのかづ
さの家より、某を養子よせんとひたすらこのこんぼう、父國久の仰より、よ
しみ有かつさの家、筋なきと云ふもあらす養子と成て平家は、何よ、去

あがら、今より後の親子兄弟音信不通、それをいかよと云ふ、二さいの弟
が人となり父が名字を受つが、兄弟源平と引わかり、一せんも及ん時
平家の方より兄有と知らば、はんあいもせまり義理も迷ひ、思ひぬふか
くを取もやせんと、行末思ふ親の玄ひ弟が爲と思ひ、一生不通としてく
れるが、却て親への孝行と、理も當りたる父の詞我のそれより平家と成
は身の未二さいもて何辨もあらぬ、上父母深く隠せしなれば兄弟有共
知れぬ筈、我もは身の面肺に覺ず、愛甲の家、改めしとい元より知
ぬ、箕尾谷四郎を弟と知たるせうこのこりやしい女房、我懷の一包人
とみせてくれよと取出させ、だんのうらの戦も引ちぎつたる兜の鍔、我
高名の印ぞと取て歸り能見れば、うら書も記せし、弓矢神の詭託宣、八
幡座より鍔迄書下したる父が筆、則愛甲の名字の因縁、あいする甲の家
の重寶是を着せし、みかのや、我弟もて有ける物をあしらよしなき手

がら達と悔くやむゝかへらぬ浦波のあゝと消行平家の果我一人残りしに運
つよき景清賴朝頼朝を討うべしとふてきよも思ひ立、こんきを碎くだゝかひもな
く無念むねんの月日をくらす内、みかのや四郎國時ときが我を狙ねらふて尋ると是成あ
こやが物語、つくづく思ひ廻めぐらせ、實まことの父がかたみと云廣い天地の其
中、たつた獨ひとの弟憐あはれをかくるゝ兄の道、所詮しよせん賴朝を討たるとて、昔の平
家と取立る公達きんだちとてもあらばこそ此上こゝの我身を捨弟しやていと高名させ、弓矢
の家を起させんと、思ふゝ幸ゑんを引たる此やしき、邊へんと尋あふ物か
二つゝ又運かちゝ叶かなひ、賴朝は出でつくゝいさば、本望とげんと入込かすがひし、鑑かんじあ
んのぬけめなく廻りあふたる我弟、命をおしまぬ働をかんせし故、景
清がほうびのなわめゝ及びしぞや、只今かへす其鑑兜しころかぶとは繼ついでで家も繼つぎ手
がらにかゝやくほし兜と武士の名をてらしてたべ、此上ゝ兄なりとて
なはをどかば直すくゝかん當、他人と成景清取逃にがしてゝ耻辱ちじゆゝ耻辱重かみぢるが

合點かどから釘かへす詞詰心もこたへて頼もしき、みみのやはつと飛
しさり頭を地も付涙をあがし親のほ慈悲兄上のほ情何と報ぜん詞も
なし、知ぬ上との云ながら勿躰なくも組伏て、昔の武士も歸らんと笑を
含し淺ましき、六度契て兄と成惠も有る弟の七度の結なしもせで、結か
らむるまばりなり、天の照覽空恐ろしよしほかん當あらばあれ、いでい
ましめをと立よればふり投つて愚く、弟と知ず兄と知ず、知ぬ昔は歸ら
ぬ道、互の因果のあざなへるなわめと思へば悔もなし、女房ももふほゑ
な、兼てかくと語なば、心落さん不便さよ是迄のかくしゐたり、鎌倉へ引
れなば大方永い別ならん、何云殘すともないが娘を無事よと計みて、よ
そめ遣ひよまざらす涙あてやいとかうの返答も、泣沈たるうき思ひ、さ
つしやりて白梅がわたしがあいをときますれば、どつこへもさなりは
なしと又景清も取付ば、小ざかしき弟嫁、此なれといて侍拾させ、誠の

さくいんと成、下らせ士よ夫の顔汚せか、一時も早く鎌倉へ伴やつと
 立上れば、情ない兄人、某が身よも成思ひやつてどかきくどく、聞分も
 あきおのこ、身こそ聞分なしと、争果しも歎え沈み二人の女房、根井
 太夫横手を打、仁成哉義成哉、先刻よりかゝるいよ目を泣はらしひよ、み
 おのやが心底のせつなき推量いゑつれ共、景清の心ざし深きぞたいに
 却て不孝、責ての恩を報せんあこや殿を身よ引受、幼娘を養子とせよ
 此大彌太が初の孫、時しも三月十八日、けふの祭の神聖人丸娘と名を呼
 て育る老の樂みと歎の中、の悦び顔、景清あつと頭をさげ、頼もしき詞
 望いたりて一門一家、廻り合たる月も日も其元暦の八島の戦、取も直さ
 ず三月の十八日、信ずる佛のほる日、臥刑欲壽終、念被くいん音の、力を
 るんと疑なし急げや急げと先よ立いさひな付あけ取、心えほれ
 て立かぬ、あこやの夫よ耻らいて涙、吞込くもり夢幼き娘を、抱上是な

ふ今のとし様が、鎌倉へござらしやるめでたふ頓てお歸ど、さそふく
してたもふ、其次手よもとのとし様顔の見おさめ見せおさめ、永いさら
ばのさそふをしやど、我身の心かこつけの、詞も涙よむせび入身を打ふ
して歎くよぞ、かゝるあわれも大彌太も涙たゝゆるまへくめ、浮世の
中も武士程義理の悲しき物なれ、云たさ泣たさこらゆるつらさ、なぜ
も二人の腹からのさくんとや大工も生れあんだ、職人の身ならばなあ
こふしたとて有まい物と、さすがに老のくりとよ、白梅あこやも顔見合
つゝみかねたる歎の色わつと涙の、いと櫻庭の、立木もまがふらん、景清
わざといかりをなれ、みれん也愚也源氏そだちの侍の會者定離をも
わきまへず、さい子を忘れ親を忘るゝ弓矢の義心も知ざるか、耻を耻と
も思はずやと聲あらしかよいひはなせば、大彌太歎きおしとめげも
誤つたりそれよく、音も聞へし景清を、からめ取たる箕尾谷が興れり

くちせぬ石だゝみ、根井の太夫が家名をつげんとかど出とぶくとのは
 ん、深き涙を忍びの緒兜もむかしよ立かへる、鏝のほしの花の兄、かつ色
 見するは恵といさみ立たる匂い鳥、つらなる枝よ若木の花嫁老木の松
 よみどり子の、いたいけ盛見残しておしむや、春のほし月夜鎌倉、さして
 ど急ぎける

○第五

百戰百勝勇士の名を定がたし、死を安くして名をあらわすといへり、か
 づさの景清みづから頼朝の手よ渡れば、扇子が谷よつめ籠をえつらひ
 取ておし入、けいごい、在鎌倉の諸大名、一日一夜づゝ番がわりよ預りて
 きびしく非帝をいましめらる、根井の太夫希義當番よて未明よ相誥、見
 れば門々當所の幕海扇の紋所、昨朝より今朝までの岩永左衛門當番よ
 き、根井の太夫番代よ參つたりと、云入れ共役所を渡すていもなく、走つ

て出る人息を切て戻る人、足をどかせ櫓の齒を引どくなれば何ごと
やらんと根井の太夫、不審あがらも立やすらひ返答おそしと待おたる。
まばらく有ては通り有べしとあんないさせ、岩永左衛門はほくと立
出、根井殿早速の番がわりは太儀千万、お目よかゝつて詞もあい、先
以箕尾谷殿景清を生どり高名ひるいなく、貴殿も昔より立かへり親子
ならんでの勤目出たいとすそふかは大悦推量致いた、扱其景清も付
てうと、は了簡も預らねばならぬわけ有、お聞なされ、籠をぬけついと致
した、とい入口の錠おろさずか、但は水道廊などよりぬけ出し、か、いづれ
の道よも不念ありと肝つふせば頭をかき、それなれば下々の不念とす
分も有が聞てたべ、櫓白檣の木の長さ一丈有物を大地へ七尺はり入
上三尺のつめ籠櫓でくもでかうしを切くみ、一尺二寸の大釘うらをか
へさずひつしと打、足を籠より外へ引出し入ちがへ七十五人して引た

る楠くすのきよてわけほだしをうたせ、ぞつちやうつめがねたうく樞大くろいばん
 ぞやくをつみかさね、是ねの根ほりの大竹つゝも切てかづかせ身み動も
 ならぬ、是ねはらんなされ此籠このを、やぶりましたと幕引まくひのくれバ立寄見て
 びつくりし、是ね程ちやうぶと拵こしらへたを、やぶる音が邊へんのみへ入ざるか、
 面目もないそばゐてみぢんもみへはいらず、くつゝりと寝たまの
 夢程も存せあんだ、只今より明朝迄あしたまでの貴殿のほばん、此通り言上なさる
 れバ此岩永、よい仕合で遠嶋とんたうに見へて有り、了簡りょうかんとすの餘よの義であい、
 方はうへ追手おつてをかけたれば、召めしとつて歸るの早ふて五つかそふて四つ迄
 さたなしゝなされ下さるれば大名一人は取立へ、目見へぬと堂塔どうたう
 こんりうさへなさるゝじやござらぬか、根井殿、ナヤとあまへかしれバ
 何さく、みおのやといふ臆病者おくびやうの子を持、どばしりのかゝつた此太夫
 又頼たのとないはづ、いゝが笑ひ、是ねぞゆつない、それをこゝで仰られ

てい消たいく、白梅殿はこん禮何やかやのお悦びよめんじ、せひお願
と手をする所へ、荒木源五息を切てかけ付惡七兵衛景清を三个村とす
す所みて生どり、只今は引て參ると訴ふれば、岩永いきくいきり出
し、根井頼と何もない、追付景清渡しやと、手のうらかへす吾も引ぬ
前後をかこみけいできびしくつれ奉る、根井の太夫きつと見、是が逃
た景清か、みおのやが生どつて差上し景清も似り似たれ共そふでな
い、さつするは是の彼井場の重藏、景清もして此根井受取と罷ならず、刻
限うつる此通り言上せんと立出る、おやち様せわしない、まあ半時待
てたべ追付誠のがきますわいの、やい者共、追うは又いけく、と追かけ
させ、扱の傍講釋師めか下河原でも取ちがへ、一度ならず二度ならぬ妨
やつ、何として腹ぬんと立蹴もどうとふみたほし足も任せてさいなむ
所へ、誰訴しか頼朝公重忠も口どらせ、ひづめをとらせかけ付給へば岩

永大さよはいもうし、頭かしらも天の落おちかゝるかと土つちふひれふし恐れ入い只今調
 言上仕らんと存る所ところに駕がをくるしめ奉る、夜前景清籠ろうを破やぶりぬけ出候、
 言語道斷ごんごだうだんのよつくいやつと、いわせも立ず馬上ながらに聲高く、籠ろうも入
 たる計はかりもて逃にげうせぬ物ならべけいごを付るゝ及ぶべきか、長く一人ゝ
 ぼんさせてい怠おこたゆだんも有べきかと、一日一夜を限つてかわるゝけ
 いごせよと云付いひしなんの爲、籠やぶを破つたる景清よとがいなし、番を怠
 り籠を破られ、取逃おのしたる儕せいのれこそよつくいやつ、諸士しよしの見せしめ急度きつどけ
 いばつゝ行おこへ重忠と、立腹大かたならず見へたる所へ、みかのや四郎
 汗あせをひたしかけ來り、籠調を破り落うせたる景清、是へ參上仕るとす詞の
 下よりも、妻のあこやゝ手を引れ片手杖つえをつくと見れば、兩眼りやうがんく
 り出し東西、わからぬ其ふぜい、十藏驚走寄、御身がとを聞たる故何とぞ
 うバひかへさんと來る所、景清籠調を破やぶり落うせたりと尋廻る、嬉うれしやゝ

い所へ出くわせし、兼て命よかゝらんと念願のこゝぞと悦び、景清は
有と名乗て安くと生どられし、其間、落延させん爲是迄來る十藏が、
心ざし、無となつたか直ぐといづくへも落てくれぬ、そバからもなせ
氣を付ぬ妹、十藏が思ふ程もない、曲がない景清と云だんだふんで、泣
ければ、なふ其氣も付たれど、憐が知たと云やないと云かられて、泣て計
どすがり付重て袖をまぼりける、重忠はらんじ珍らしや景清、籠を破り
遁れ出たる身のいかなれば立歸り、殊、兩がんをくつて盲目と成たる
いふかし、賴朝公も聞し召、心底を明されよ承らんとの給へば、
の給ふうち、殿はな、お尋なく共、上んと存る所存餘の義、あらず、
かくは敵と成て付ねらふ我なれ共、どかく命を助け、みかたよ、召れん
爲のは情、や及ばず、海、あせて山と成共、二君、仕る我ならねば、云
せん此籠、ふみくだき、せき破りのどがを拵がいせられんと心づきしが、

思へば其日のけいこの侍、籠を破られ取逃し、我故とかめよ預らんも罪作りと、一日く延せし所、昨朝より岩永が、ばんよかいつてつらを見るよりあら嬉しやいこん有左衛門どがめよ合ふが殺されふが、いよがけのだちんどやらんこよひぞ籠の破り時ど、なんのくもなくぬけ出し、外よどがをこしらへて誅せられんどの我念力、もふ助て政道立まじ、急いで我を誅せられよ、又兩眼をくりたると、今鎌倉のはん玄やう、頼朝のおせいを見るよ付二たびあだをなすまじと、思ひ捨てもぼんぶ心見ず、いうらみもかこるまじと頼朝を二たび見ぬ、分別、みらい遙くあだをあすまじ、恨を殘さぬ心のちかひ、ゑぐり捨たる兩がんに、頼朝殿へ景清が、今生みらいの寸志ぞや、首打てあんどあれと首さしのぶれば、頼朝公、あつばれ武士よものゝふよ、平家の恩を忘れぬ如く、又頼朝が恩をも忘れず、月日よかたどる兩がんに、我故くつたるけなげやと、勿昧なく

もは大將は落涙^{らくなみ}ぞ、有がたき、左衛門一人むくりをおこし、左程あいた
首ならべ左衛門がさらへ落し、籠を破られ取逃したや分よすると呼^よべ
れば、餘りのとよは大將、どかくの証^{あかし}もましませずあこやこらへず、あ
のいふたつらわいの、目の見ぬ人の首取て、云分よ成か、手がらよ成か
あほうくさいと耻かしすれば、女房^{ごふ}だまれ、岩永が手よあふ者のめくら
か、ぬざりか、子供ならで外よいなし、尤もならべ、首取て見よ、ふくろの
土を丸めて我子とし、くらげのゑびを以て眼とすると楞嚴經^{りやうごんきやう}よ有と聞
我其如くあこやを以て眼とせん、後々我をかいほうしやいべの向ふ其
万へ、引廻して教^{おし}よと杖打ふつて立上れば、源五手^{げんごて}つたへ盲目^{もうもく}とてぬか
るなど左右^{わだち}も別切^{わかち}かゝる、根井親子の景清もゑん有顔を憚て、よそもの
知ぬ氣をもみ上げ心を冷してひかゆれば、十藏の又景清が詞のいじを
立させんと、とめず指出^です縛^{しば}れながら眼をくばり、すわといひ、飛か

らんと打太刀先又氣を付てそりや、く、右よそれ左よ、はらへあぐれと
辭を懸、我手をもつてたゝかりぬ心のやひばのまのきをけづり、頭又上
るいけふりの火花を散すごとくよてまたゝきもせぬ程もなく岩永主
従太刀打落され、二人一度よしがみ付、取てふせんと身をもがく、景清ち
つ共たぢろかず、二人が首筋兩手よつかみ、ぐつとしむれば眼を見つめ、
よわる所を取てふせ膝よひつ敷一息ついたる心の内嬉しさとへん
かたもあし、其隙あわこや立寄て十藏がいましめ切はどけば、なふく
景清、一人又二人の手がら過る、岩永は、我よくれと取て引立、どがの儂が
心よどへと首、ゑいやつと捻きれば景清悦び、儂も主の供せよと源五が
首も一時よ、ちよいと引ぬき捨たる、手習子供の書拾し筆の首ぬくこ
とく也、十藏かたへの太刀追取て大音上、助けんと云君よ、君の情有、討
れんと云景清の二君よつかへぬ忠義有、中を取て此七兵衛景清が腹切

上の情も忠も是迄也と太刀をさか手と取直す、重忠はらんじ、十藏、景清がと、此曉洛陽清水寺のくわんぜ音君の、枕と立せ給ひ、命を助けゑさせよと、みだい所もまのあたりれいむを蒙り給ふ、それ故是迄馬を出されたと、いよもしらじ、かりとも景清となつて生害せば、大玄のかこゑ背くとわり、名代の切腹尤ながら無益也といひ給へば、然らば家人岩永を手とかけ討たる其誤、井場の十藏と立かへつて切腹せんと、はだ押ぬいで身づくらふ頼朝扇を上給ひ、やをれ十藏、左衛門を討たる其どがを糺明せば、あんふんは腹切すべきか、我此曉景清を助よとく、いんせ音の靈夢を蒙る、さればこそ左衛門が、盲目の景清と乃ひしをせいせんといひ思ひしが、大じ大ひの、かうと有景清やわか過、い有まじと思ふ、またが、いず却て主従手とかりし、い、景清十藏が殺すゝあらず、二人は千手の手をかして、惡人を殺させ給ふ、是こそ還着於本人經文あら

たゝおやまりなき、大悲のちかいと覺たり、然るを汝切腹せば、卉の觀善
懲惡の心、またがふ大惡逆、恐るべし。今より我、奉公し譽れを末世、
に残すべし、又景清のふちすべき平家もなく、頼朝が祿も受まじけれ、
飢ゝつかれん不便也、兩眼のくらく共心ざし、日又向ふ、日向勾當の官
を蒙り、なじみの平家を琵琶かたつて、片時も昔を忘るべからず、万事
の根井親子の者宜くはからひ得さすべし、个様も上下和すると念彼く
いん音の力、我大けい、是又過すいざ歸らんと立給へば、夫婦兄弟みお
のや父子首を天地にひれふし、詞もなく、有がた涙ふし拜み、
君を傳き立歸る佛道、武道の助として、治りなびく源氏の政道、万歳
の末かけて盡せず、つきぬ八千代の松かいらぬ色、吳竹のふしを重ねて葉
もしげる五穀成就、民安全おさまる、國こそ目出たけれ

明治二十四年七月卅一日印刷
明治二十四年八月一日出版

翻刻者兼
發行者

日本橋區通四丁目四番地

內藤加我

日本橋區新和泉町壹番地

印刷者
瀧川三代太郎

日本橋區通四丁目四番地

發兌
金櫻堂



岡本可亭編纂

處世の道は長せんと欲し書冊の必要を知る人へ是より以下に掲載する廣告を見よ書冊の世に裨益する尤も信切なる好友なり處世の道は長せんと欲し書冊の必要を知る人へ以下に掲載する廣告を見よ！

女

寶

全壹冊 正價金四拾錢

本書は女子一代之教育技藝音樂修身等網羅して余す所なく女子處世之要典なり
 輓近文化之風潮は隨ひ世は教育を頌揚する者い尤も女子の教育に注意する所なり
 女子其人の教育如何に其兒子は波及し清淨無垢の幼童をして或は賢たらしめ
 或は愚たらしむ是れ女子教育の忽かせよすべからざる所以なり苟も尊長の慈母
 たらん者い一續の勞をおしむ勿れ

漢香小史譯述

指

環

全一冊 正價金二十錢

嚇々として美人の軟手は輝ける者の指環なり美人能く指環を以て艶男を迷はし
艶男之を以て美婦を誘ふ嗚呼指環は月下氷人なり本書に至ては即ち然らず此可
愛的なる指環を以て思ひべく怖るべき盜賊の規約を結び世人の耳目を暗ませし
犯罪の始末を書綴りし者にして原著始て佛京巴里より發賣せし時喝采を博せし
事他無比類なく遂は傑作の中より算へられたる小説なり頃日漢香小史之を譯して
都新聞に掲載し世評高かりしを今度一冊子と爲したる者なれば其面白き事の繁
瑣の贅言を待たず諸君既に知り給はん

懷中義太夫

續倭文範合本

全壹冊 正價金拾四錢

卷中目錄

●伊賀越岡崎の段 ●彦山六助内の段 ●桂川帶屋の段 ●忠臣藏六段目 ●日吉丸三
の切の段 ●累土橋の段 ●加々見山草履打の段 ●忠臣藏七段目 ●朝顔濱松の段 ●
菅原車曳の段 ●廿四孝勘助住家の段 ●矢口八郎物語の段 ●覺仇討餞別の段 ●守
護城正清本城の段 ●盛衰記源太勘當の段 ●累埴生村の段 ●姫小松島物語の段 ●
彦山須磨浦の段 ●花上野志度寺の段 ●千本櫻茶見世の段 ●忠臣藏三段目 ●忠臣
藏五段目 ●伊賀越六ッ目口 ●覺仇討九の切 ●太功記本能寺合戦 ●合邦社内の段
●岸姫松朝比奈上使 ●蘆屋道滿狐別の段 ●安達宗任物語の段 ●三日太平記松下
往 ●劫萱山の段

名作三十六佳撰

出版既成目次

- | | | | | | | | | | |
|------------|------------|-------------|-------------|---------------------------|-------------|---------------------------|---------------|-----------|-----------|
| ●繪本太功記全一冊 | ●生寫朝顔日記全一冊 | ●假名手本忠臣藏全一冊 | ●伽羅先代萩全一冊 | ●武田信玄
長尾謙信
本朝廿四孝全一冊 | ●菅原傳授手習鑑全一冊 | ●十三鐘
絹懸柳
妹脊山婦女庭訓全一冊 | ●逆櫓松平かゝ盛衰記全一冊 | ●矢箴梅 | ●奥州安達原全一冊 |
| ●一の谷嫩軍記全一冊 | ●壇浦兜軍記全一冊 | ●蝶花形名歌島臺全一冊 | ●彦山權現誓助劔全一冊 | ●伊賀越道中雙六全一冊 | ●三日太平記全一冊 | ●太平記忠臣講釋全一冊 | ●花上野譽石碑全一冊 | ●北條時頼記全一冊 | |

名作三十六佳撰

出版既成目次

- 國姓爺合戰 全一冊
- 神靈矢口渡 全一冊
- 小野道風青柳硯 全一冊
- 箱根靈驗壁仇討 全一冊
- 太平記菊水の卷 全一冊
- 玉藻前曦袂 全一冊
- 義經腰越狀 全一冊
- 義經千本櫻 全一冊
- 錄倉三代記 全一冊

- 御所櫻堀川夜討 全一冊
- 傾城阿波の鳴門 全一冊
- 鐘ハ上野カ淺草ハ野カ歟 花雲佐倉曙 全一冊
- 卅三間堂 平太郎祇園女御九重錦 全一冊
- 關取千兩幟 近刻
- ハ染久松新版歌祭文 近刻
- 蘆屋道滿大内鑑 近刻
- 局岩藤中老尾上加賀見山舊錦繪 近刻